

GE129
43



* 0008412000 *

0008412-000

GE129-43

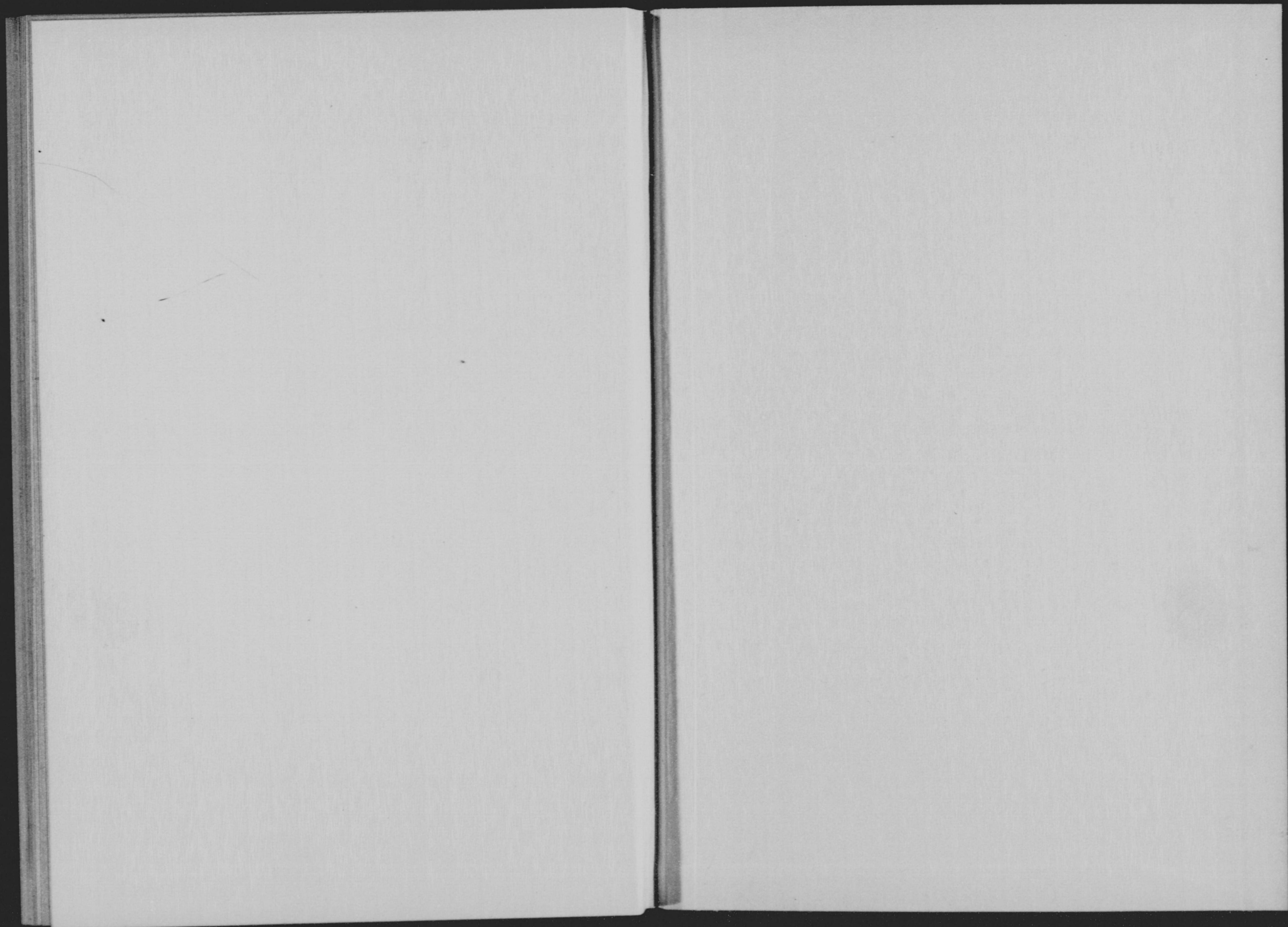
總督政治史論

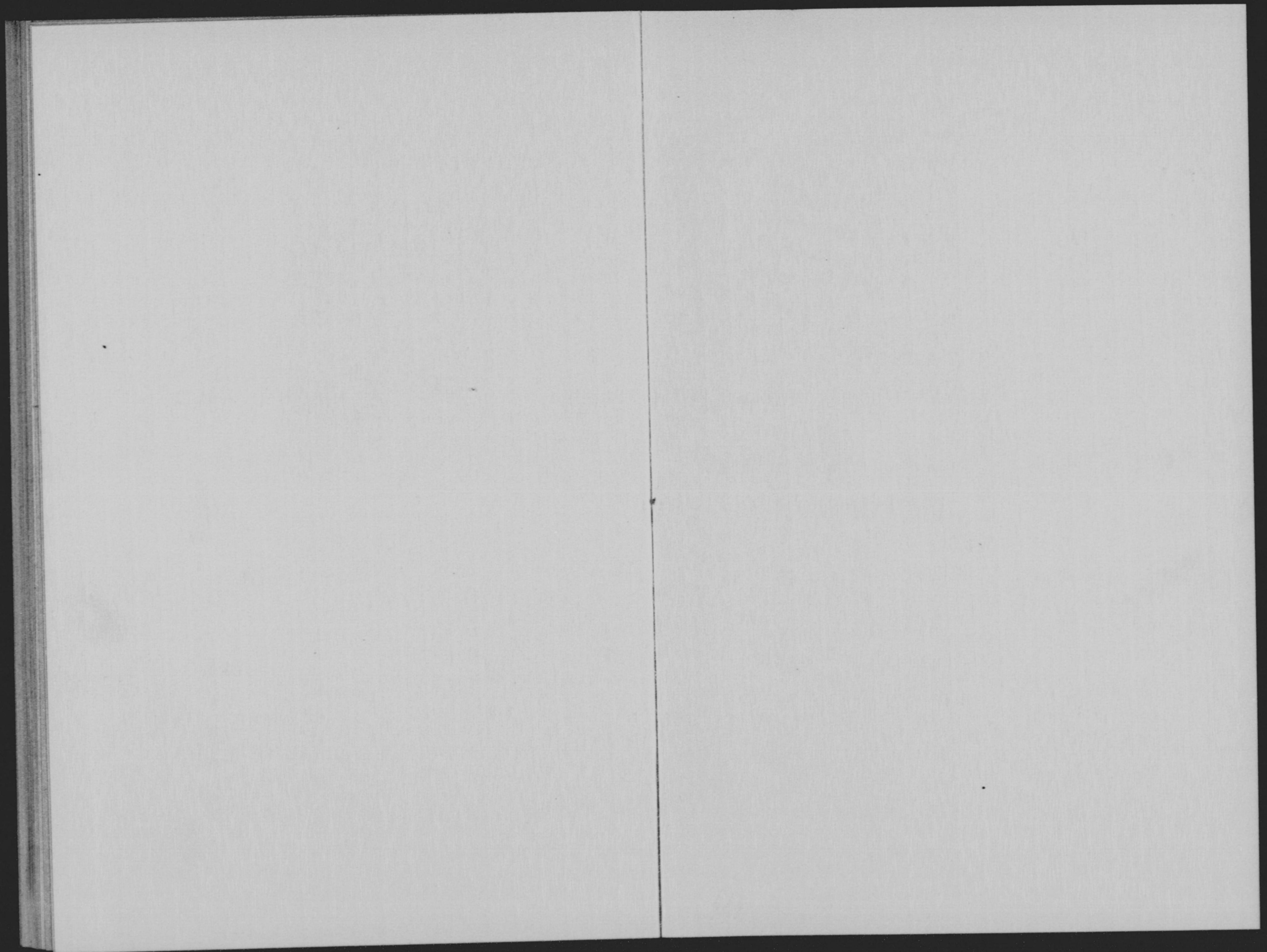
青柳綱太郎・著

青柳綱太郎

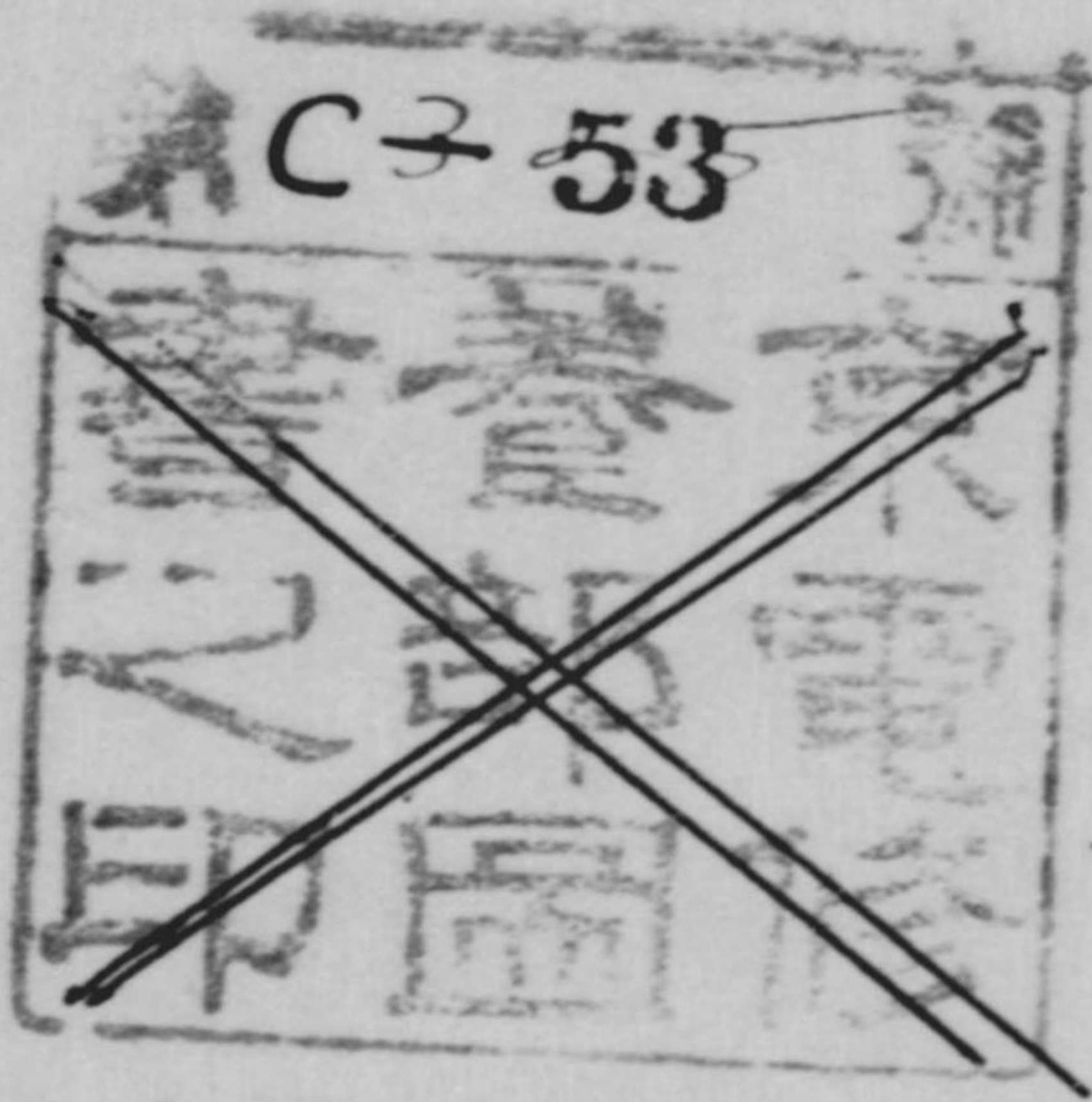
1928. 3

ABH





72
52



寄贈
寺村重氏

47x52

總督政治史論
全

GE129
43



317.81

77W00484

GE129
43



初代總督
寺內正毅伯



31781

77W00484



二 代 總 督
長 谷 川 好 道 伯



三 代 總 督
齋 藤 實 子



四代總督
山梨半造氏

自序

天下の政道に與かり、朝鮮を統治するの總督が、經國濟民の見地に立て、新領土經綸に當るには、其の政策と政術に於て、寬嚴宜しきを得るの機略と、燃犀の眼力とを必要とす、大絃急なれば小絃絶し、小絃急なれば大絃其の響きを失ふ、總督政治以來既に二十年に近し、歴代總督は果して彈調を整へたりや。

古へ高漸離筑を易水の上に彈て、荆軻之が爲めに慄慄す、名手の人を感動せしむるや、政治に於

ても亦然り矣、借間す、總督政治は二十年以來、
經國濟民の上に、吾人に如何なる感激を與へ、且
つ與へつゝあるか。

孔子の春秋を作るや、其の意は天下の改造にあ
り、山陽の外史を論述するや、其の意も亦天下の
改造にあり、不肖、時事に感ずること深く、春秋
と外史の筆法を以て總督政治を史論せり、虎を畫
いて、猫にも類せざるは、不肖の淺學不文、蓋し
慙愧に勝へざる所なり。

昭和三年春三月

京城新聞社樓上に於て

草 莽 學 人

例言

一、世の武斷政治を論ず者、從來悉く寺内伯の死屍に鞭ち、精討細檢して
寺内伯の勢に酬ゆるもの、幾むも一行も傳へらるゝなし、伯の功業は野に咲
く一辨に若かざるか、否々伯が經國の遺勳は、決して野草の如く蹂躪さる可
きに非ざるなり、余は本著に於て僅かに伯の爲に氣焰を吐く。

二、朝鮮統治の成功は、物質的と精神的の兩面に亘りて完成するを以て、
萬人の容るゝ所の成功と謂ふ可し、物質的の方面とは、經濟的の方面の成功にし
て、精神的の成功とは、教化と同化方面の成功にして、齋藤子は此の兩面に於
て、果して成功したりや、物質的の方面の成功は輿論の許す所、精神的の方面に
於ては、昏沌として其の成否を傳ふ可からず、蓋し成敗の岐路に彷徨しつゝ、
ありたればなり。

三、此の成敗の岐路に彷徨せる精神的事業は、新任山梨總督に於て相續せ
られざる可からず、山梨總督より以後の政治は、數年後更に本書の續編とし

て史論すべし。

四、本書中京城新聞に掲載したる舊稿にして、適切なるものを採りて篇成したるものあり、そは其の篇尾に年月を記入す、讀者諒せよ。

總督政治史論 前篇

内容目次

◎武斷政治時代(寺内…長谷川總督時代)

- 第一篇 先づ併合の理由を説く……………一
- ……………帝國は何故に韓國を併合したか……………
- 第二篇 寺内伯の武斷政治……………二〇
- ……………日本人は憲法治下の國民だ……………
- 第三篇 寺内伯の法治主義……………二五

……專制政治決して不可ならず……

第四篇 寺内伯に蹂躪されたる移民策(一)……………三〇

……寺内伯無資本者浪人を驅逐す……

第五篇 寺内伯に蹂躪されたる移民策(二)……………三六

……土地兼併の趨勢と寺内伯の躍起……

第六篇 寺内伯に蹂躪されたる移民策(三)……………四六

……民族的膨脹は世界の趨勢なり……

第七篇 寺内伯の母國愛と自作自給觀……………五三

……財政獨立は寺内伯のお手柄……

第八篇 武斷政治の軍事經濟觀……………六一

……余は寺内伯に滿腔の同情あり……

第九篇 寺内伯の偏黨處置……………六三

……少論の黨派が惨めな最後……

第十篇 言論の徹底的壓迫(一)……………六八

……言論文章は半文の價値なし……

第十一篇 言論の徹底的壓迫(二)……………七〇

……寺内伯怒つて猛虎の如し……

第十二篇 言論の徹底的壓迫(三)……………七九

寺内伯の靈魂朝鮮に颯蕩せん……………二二

第十三篇 日本人の自治制廢止(一)……………二四
 ……在鮮内地人の輿論大に沸騰す……………

第十四篇 日本人の自治制廢止(二)……………三三
 ……猛虎深山に往く處目に狐狸の躍るを許さず……………

第十五篇 日本人の自治制廢止(三)……………三三
 ……寺内伯は大方針に猛進するのみ……………

第十六篇 電光石火的土地制度の確立……………三三
 ……寺内伯が經國濟民の大記念……………

第十七篇 驛屯土の整理と小作制度……………三三
 ……小作農誠腹して帝徳風の如し……………

第十八篇 李王家の榮光……………三三
 ……人道及文明に貢獻する帝國主義……………
 ……昌徳宮を我宮家離宮とせよ……………

第十九篇 道路交通の大整備と都市政策……………三七
 ……寺内伯が一氣呵成の大事業……………

第二十篇 朝鮮文化の古跡保存……………三〇
 ……寺内伯は多感多恨の政治家だ……………
 ……偉大なる文豪、伯や勞せし哉……………

第二十一篇 寺内伯の鮮滿經濟統一……………一四

……寺内伯の大陸政策實現……………

第二十二篇 寺内伯の理想的治安の創造……………三三

……憲兵警察合一制度の活躍……………

……憲兵制度が治安に貢獻せし功勞……………

第二十三篇 朝鮮産業革命時代……………三三

……産業革命時代の現象を説く……………

……寺内伯の産業自由競争主義……………

第二十四篇 寺内伯が佛教振興の準備……………三五

……佛教道德上の暗黒世界たりし朝鮮……………

……朝鮮民族は自己の境遇を自覺し能ふや……………

第二十五篇 寺内伯の内鮮人同化論(一)……………一四

……寺内伯と著者との同化論談……………

……寺内伯の同化達成の準備とは何……………

……余の大和魂論と同化不能論……………

第二十六篇 寺内伯の内鮮人同化論(二)……………二六

……寺内伯と著者との同化論談……………

……伯の遠大にして根底ある同化論……………

……余は同化力なき形式的文化を論ず……………

第二十七篇 朝鮮教育策の矛盾……………二六

寺内伯と著者との教化論談……………

鮮人は希望に生き内地人は其の日暮し……………

第二十八篇 朝鮮農民の革命時代……………三九

豪族の農奴たりし朝鮮農民……………

第一革命済みて第二革命來らむ……………

第二十九篇 寺内伯の保護貿易主義……………三〇〇

朝鮮貿易の独占主義を論ず……………

帝國の基礎を磐石の上に置く……………

第三十篇 寺内伯の禿山整理……………三〇三

王道坦々として廢邦を活かす……………

伯が治山の功績と禹が治水の功績……………

第三十一篇 農業整理の理想……………三〇五

寺内伯が産米増殖の方針……………

族長主義を利用せし農民政治……………

第三十二篇 始政五年朝鮮共進會……………三〇〇

經濟的長足の進歩に刮目す……………

經濟界の奮興するは當然……………

第三十三篇 寺内總督去り長谷川總督來る……………三〇四

天才的武斷政治家の鐵腕……………

長谷川伯不運の葬を送る晚鐘……………

第三十四篇 朝鮮騷擾ば獨立運動……………三三

……騷擾の發端と獨立の宣言……………
……長谷川總 に武力を發揮す……………

第三十五篇 獨立思想の運行(一)……………三九〇

……僭稱上海假政府の盲動……………

第三十六篇 獨立思想の運行(二)……………四〇一

……子爵金允植等の獨立請願……………

第三十七篇 騷擾に對する見解の相違……………四三三

……原首相輿論に及ぼす影響を憂慮す……………
……長谷川總督騷擾の責任を負ふて辭職す……………

……朝鮮民族の性格に微妙の變化……………

第三十八篇 武斷政治論……………四三

……遊牧的狀態の脱却と經濟的成功……………

……朝鮮民族生活の向上と新思潮……………

……朝鮮民族智能的發展力の破壊……………

總督政治史論(前篇)目次終

齊藤子の天道教を活かすは徳政の第一歩

第七篇 民度に超越せる教育制度…………… 夫

朝鮮人教育と同化の悩み

大學の設置などは尙早だ

新教育制度の豫算膨脹

第八篇 産業革命の範圍…………… 九〇

一、農業の進歩時代

二、工業の進歩時代

三、貿易の膨脹時代

四、労働者の革命時代

第九篇 文化の變遷と文學の革命…………… 一〇二

徳教と人格養成に貢献したる儒學

藝術的高調の小説と美術の發達

第十篇 植民的同化新論(一)…………… 一三三

齊藤子の内鮮雜婚政策評

民族的偉力を用ゆる同化策

精神的に難治の境遇に迷ふ

第十一篇 植民的同化新論(二)…………… 一三四

根本的方針より策劃せる農業植民

農業出身の在郷軍人を歓迎す

散在移民を選ば集團移民を講ぜよ

第十二篇 學校 亡國 論(一)……………二四

……高等遊民の繁殖と其の防禦
……人間的生活の人格的方面と教育
……民衆は遂に治者を蔑視せむ

第十三篇 學校 亡國 論(二)……………二五

……朝鮮統治の要領は教育第一主義か
……都會へくと集中する浪々の學生
……農村の一角より社會問題起らむ

第十四篇 朝鮮 教育の 破綻……………二六

……慘憺たる校紀の頽廢を見よ
……教育の破綻は文化政治の破綻

第十五篇 補助事業の 紊亂……………二七

……水利組合の現状を論述し
……水利不正工事の徘徊を嚴戒す

第十六篇 法治主義の 墮落(一)……………二九

一、運用拙なき刑事政策の弊
……司法官の沈黙が統治に及ぼす影響

第十七篇 法治主義の 墮落(二)……………三〇

二、湯淺政務總監に與ふる書
……糊塗と瀾縫の政治を排す
三、大盜續いて出でむ文化政治を警めよ

法の偏頗は文化政治の破綻

第十八篇 法治主義の墮落(三)……………二〇〇

四、司法官に警告す

判検事大に戒めよ法治は解體せむ

五、司法官に與ふる書〔一〕

法治主義は今や病床に在り

六、司法官に與ふる書〔二〕

經國の危機累卵の如し

第十九篇 齋藤總督の二大功業……………二〇六

一、九百萬石の産米増殖計劃
二、三億二千萬圓の鐵道擴張事業

第二十篇 貧民問題と米價價題……………二〇七

一、朝鮮貧民の歴史的考察
二、貧民問題と米價問題の衝突
三、結局貧民救濟策を講ぜよ

第二十一篇 停頓せる農政問題……………二一三

經濟學者の理論と實際

農政の根本策を確立せよ

第二十二篇 思想問題(一)……………二一七

- 一、民心の惡導者成敗
- 二、憂ふべき思想的叛逆

第二十三篇 思想問 題(二)……………三三

- 三、民族的對抗心の運行

第二十四篇 思想問 題(三)……………三三

- 四、諺文朝鮮日報記者に誨ゆ

第二十五篇 思想問 題(四)……………三三

- 五、所謂朝鮮史問題

第二十六篇 文化政治下の迷信跋扈……………三五

- 文化政治の綱紀弛緩を誓む……………

第二十七篇 民族魂と同化の最後的研究(一)……………三七

……鳴りを打て社會の表面に妄動せむ……………

……余は諫國論千言を草す……………

……眞の觀察者としての資格……………

……朝鮮魂の生起と吳越同舟……………

第二十八篇 民族魂と同化の最後的研究(二)……………三六

……齋藤子の雜婚政策を危ぶむ……………

……内地人も朝鮮人も大覺悟を要す……………

第二十九篇 朝鮮縣治論(一)……………三六

- 一、縣治の前に論ず

- 二、縣治の統制を説く

第三十篇 朝鮮の縣治論(二)……………四八

三、行政區劃の考察

四、自治制施行の基本調査

第三十一篇 齋藤總督去り山梨總督來る……………四八

齋藤子病軀を以て骸骨を乞ふ

山梨 朝鮮 總督に望む

總督政治史論(後篇) 目次終

總督政治史論 前篇

京城新聞社長
朝鮮研究會主幹

青柳南冥 著

◎武斷政治時代 (寺内…長谷川總督時代)

第一篇 先づ併合の理由を説明す

——寺内伯治鮮の方寸や如何に——

我帝國は何故に朝鮮を併合したか云ふこそが、近頃の朝鮮の青年は勿論内地人青年にも徹底してゐないやうだ、二十年も経過したる、今日併合の理由を説かねばならぬことは、十菊六葛の憾があるが、之を説かねばならぬほき近頃の青年は迂散である。

朝鮮は大陸の一角に突出して半島を成し、之を日本と朝鮮の地理的關係よ

武斷政治時代 第一篇 先づ併合の理由を説く

我帝國は何故に朝鮮を併合したか

り論ずれば、恰かも白耳義と英國との關係に似て居る、白耳義は英帝國に取りては重要な保證地帯たるが如く、朝鮮は日本の要塞地帯である、西歐大戦の最初に於て、獨佛の火蓋を切るや、獨逸が先づ白耳義を占領したるは、地の利を得て弱を西歐に唱へんしたのであつた、即ち白耳義を占領したる獨逸は佛人の背骨に利刃を擬し、英人の胸にピストルを向けた様なものだ、故に獨逸にして佛國を屈伏せしめたる曉は、直ちに海を跨へて、英國を征伐したであらう。

朝鮮は我日本と露支の間に介在し、日本の朝鮮に於けるは、恰かも英國と白耳義の關係よりも密接し、釜山の鷄鳴は對馬の曉鐘に依り報せらるゝの近距離である、白耳義は西歐の現勢に於て、三流四流の弱輩國だ、故に彼は永久中立を宣言せるも、國際の公法は大砲の前には空法にして、朝飯前に獨逸に蹂躪された、白耳義にして毅然たる國家を成し、獨逸の侵入を爲すを得ざらしめば、英國は決して獨逸に宣戦は布告せなかつたであらう。

佛人の背骨に
利刃を擬し
英人の胸に
ピストルを

日本帝國は已
むを得ず韓國
を併合す

支那が朝鮮を藩屏とするも、露國が朝鮮を支配するも、日本に取りては同様である、往昔朝鮮は元の先鋒と爲りて日本を撃ち、又露國と結んで南鮮に要塞地の租借を許した、朝鮮にして若し國力露支と相對抗したらんか、政治的及經濟的に於て、極東の諸國は決して平和と均衡を失はなかつたであらうが、併合前の韓國は西に媚び、北に倚り、東を欺き、外交の口舌と權謀術を以て國命を支持し、嚴然として中立し、諸強の均衡を維持するが如き態度は、前韓の國勢と二千年來事大思想に發はれ來りし民族性に於て、到底それは不可能であつた、故に前韓の外交は遂に日清戦争を誘致し、日露の大戦を招來し、海牙密使事件を勃發し、日本帝國は已むを得ずして遂に韓國を併合した。

史を按ずれば、甲申の變亂に開化黨金玉均、朴泳孝等の失權亡命以來、日韓の關係は事毎に圓滿と平和を失ひ、事大思想は韓廷に充満し、日清の葛藤は事大黨によりて誘發せられ、爲めに日清兩國は東洋平和の希望を以て、天

北京に於て朝鮮王論盛んに行はる

清條約を締結し、其の結果日清兩國は公使館及在留民保護の目的を以て、駐屯したる守備兵を撤し、日清兩國の内韓國に派兵を要するこゝあれば、互に文書を以て之を知照するこゝ、したるに拘はらず、東學黨南鮮に蜂起し、其の勢猖獗を極むるや、時の事大黨主領閔泳駿は、王命を奉じて内亂鎮定を駐韓公使袁世凱に請ひ、袁世凱より出兵請求の公文は清廷に傳達せられ、爲めに北京政府の虚榮を誇大を誘發し、清國は天津條約を蹂躪して、直ちに朝鮮に出兵した。

李鴻章等清廷の重臣は、平亂後朝鮮王を廢して清國の行省と爲さむと、北京にては朝鮮廢王論が盛んに行はれた、茲に於て我政府は出兵の議を決し直ちに兵艦を贖し軍旅を整へ、清國に出兵を通牒して、若干の陸戰隊を仁川に上陸せしめ、大島公使を護衛して京城に進軍した、韓廷は大に狼狽して俄かに清國に撤兵を要求した、此の間に於て我外務大臣陸奥宗光は、屢々清國公使王鳳藻に會見し、兩國誠意を以て朝鮮の獨立を扶植せむこゝを審議せし

支那の頼むに足らざるは露國の強大に倚らんとす

も、清廷は之を拒むで容れず、茲に至り我帝國は猶豫なく陸軍を以て大兵を朝鮮に送り、遂に日清戦争を惹起したのであつた。

清國は此の戦に於て大敗し、帝國の陸軍は清軍を朝鮮より驅逐し、直ちに遼東より北京を衝かんこしたるも、清國は特使を帝國に派して和を乞ふに及び、帝國は直ちに干戈を收め、兵亂の賠償を受けて韓國は獨立し、大韓帝國と名乗りを挙げた、朝鮮の獨立するに及び、朝鮮は日本の恩誼を念ひ、日韓の修交は倍舊敦睦にして、善隣の交誼を固くし、貿易を盛んにして、彼我の利益を保全す可しと思ひしに、支那の既に頼むに足らざるを知りし韓國は、露國の強大に倚らむと、金炳始、李完用等は直ちに親露派内閣を組織し、露國公使ウエベルは其の德顧問と爲り、親日派内閣の金宏集、鄭秉夏等は宮中に讒殺され、露國公使の勢力は俄然として政界に重視せられ、國王及世子を露館に行幸せしめた。

露公使は遂に傍若無人に威を張り、進むで財政軍事に干渉し、更に韓廷は

日本の恩誼に酬ゆるに毒藥を以てした、何ぞや、馬山浦の對岸栗九味灣に露國東洋艦隊の爲に、石炭貯藏所を露國に認可したるこゝである、露國は直ちに極東南下の政策を猛烈に發揮し來り、栗九味灣を以て東洋艦隊の冬期繫留所と爲し、一面鴨綠江の右岸龍岩浦を租借して二十五萬坪の大地域を獲得し其の海邊に砲臺を築き栗九味灣と相呼應して、旅順及浦壇の海上聯絡を取り黄海、渤海の主權を占領して、日本海を遮斷し、帝國を土足に蹂躪せむと策劃した。

帝國の外交如何に寛容大度と雖も、豈此の屈辱を忍むで露韓の横暴を許さんや、茲に來り帝國は毅然として韓廷に警告し、露國に反省を促がしたるも露國は頑として之に應ぜず、韓廷亦言を左右に托して馬耳東風の態度に出で此くて露國は二旅團の兵を送り來りて龍岩浦に駐屯せしめ、殆んき帝國に挑戰的態度を取り來り、茲に至り遂に日露の兩艦隊は先づ仁川沖に開戦し、旅順港外の海戦を爲り、次で日露兩國皇帝は宣戰を布告し、滿韓の野絶東の

露國は帝國に挑戰的態度を取り來り

海上に雌雄を決し、我帝國の連戦連勝に歸した。

日清戦争により獨立せしめたる韓國は、此くの如く帝國の好意を無視し、屢々獨立の試験に落第した、故に日露戦後我帝國は、獨立し能はざる韓國を強ひて獨立せしむるの非を悟り、列國も亦之を認めて、斷然韓國を帝國の保護國とし、我帝國の安全を計るの方針を取り、地勢は日韓を縮めて保護被保護の關係に置きたるも、韓國の君臣にして眞に帝國に信頼し、自立の實力と資格を養成したならば、譬へ保護條約は成立してゐても、次第に獨立の形勢を示し來りしは勿論である。

然るに時の韓國皇帝（李太王）は、舊政時代の殘夢未だ醒めず、帝國が國を賂し、絶大の力に依りて得たる戦争の結果を見るこゝ、羣民の變亂と等しく何等の善意をも表するなく、韓國の上下漸く施政の面目を一翻せむとする時に當り、海牙の平和會議に密使を送りて、韓國の苦境を説き、我帝國の行動を攻撃せしめた、我政府は此の報を得て其の事實を確查し、保護權を蹂躪

戦争の結果を見ること羣民の變亂と等し

されたる此の一大汚辱に對して、遂に大決心を爲し、老論少論の二大黨は相分れて其の前後始末に關し意見を奏上し、遂に韓皇の讓位を爲り、新皇の即位を爲り、軍部の廢止を爲り、司法權の委任を爲り、伊藤領統監の暗殺を爲り、李容九の率ゆる一進會の日韓合邦の上奏を爲り、結局新皇は韓國を擧げ、我天皇陛下に讓與せられしによりて、完全に帝國の一部に編入せられ、帝國政府は斯土に總督府を置き、併合に功勞淺からざりし寺内統監を以て、第一世總督とし、朝鮮を統治するこゝとなつた。

此くて東洋の平和は完全に保障せられ、極東朝鮮を蔽いし暗雲は、茲に來りて遂に一掃された、併合の理由は實に此くの如し、韓國の亡ぶるや、其の亡ぶるの時に亡ぶるに非ずして、其の淵源や遠かるべし、人亡びざるの人無く國亡びざるの國無からむ、古今盛衰興亡の歴史を、消長の跡を觀て、其の文野の分かる、機微を察するときは、不肖は一種無限の感慨に打たれざるを得ない。

國の亡ぶる
其の亡ぶる
や其の亡ぶる
の時に亡ぶる
に非ず

我れを倭奴と
稱して其の非
文化を蔑視し
たる朝鮮民族

我第一世總督寺内伯は、如何なる政治政策を以て朝鮮を治むるか、大和民族は古來より進取開發の氣象を有し、其の儒教を執へ來りし時には之に由て大義名分を正し、忠勇義烈の精神を養ひ、其の佛を輸入せし時には、忽ち大乘經の神髓を穿ち、其の師表たる唐天竺を背後に瞻瞻たらしめた、武を以ては優秀の地位にあり、文を以ては包容同化の力を有する民族だ、我廟議は寺内伯に如何なる大方針を治鮮の政治政策を授くるであらうか。

二千年來事大思想に養はれたる朝鮮民族、一千年來我れを倭奴と稱して其の非文化を蔑視したる朝鮮民族、併合に反對せる兩班儒生の露々たるとき、寺内伯治鮮の方寸や如何に、併合に反對し、或は助成せし我内鮮の識者は、刮目して之を環視した。

第二篇 寺内伯の武斷政治

——日本人は憲法治下の國民だ——

是より先、朝鮮統治の大方針は、廟議に依りて既に決定せり、朝鮮民族を日本民族に同化せしめて、一致團結したる新日本を大陸の一角に築き、我大陸發展を現實にせんとするにあり、寺内總督は實に此の大方針に則りて臨機應變の武斷政策を以て在り、且つ從來墮落其の極に達せし朝鮮の法治に鑑み、我濫測たる法治主義を發揮して、先づ朝鮮の社會を緊張せむとした、洵に朝鮮及朝鮮人を知れる軍人政治家の遠見であるを謂ふ可しだ。

然るに當時我學者たるは、操觚者たるを問はず、寺内伯の武斷主義を擁護し、其の非を鳴らすを以て能事了はれりとなし、些も善意を以て改良を論議したる者無く、操觚者も學者も將た政黨屋も、破壊的妨害的筆鋒を口吻に

朝鮮及朝鮮人
を知れる軍人
政治家の遠見

日韓併合は吾
人の關知せざ
る所なり

を向け、甚だしきは感情に驅られて、中傷的言論をなす者、比々皆然りであつた。

不肖以爲らく、朝鮮は素に極東の一大舊邦なり、韓國併合は王政復古にして、時代の要求なり。雖も、當時一千二百萬の鮮民族中、其の大部分は併合を不可とし、猛然之に反對し、盲動陰謀を逞ふして居つた、韓皇の詔勅が如何に東洋の大勢を説き、事理を盡したりして、心有る士民は忸怩として頭を垂れ、屈從しやう道理がない、鮮民は公言して曰く、日韓併合は形式的に爲政者爲政者の間に行はれ、吾人の敢て關知せざる所なり。當時寺内伯が毅然として、武斷主義を以て萬難を排せる準備を、壓力あるに非ずむば、併合の偉業を一絲亂れず無事に敢行する能はざりしは、當時の形勢を知悉せる識者の、等しく首肯する所たるは勿論である。

然らば併合後十年や二十年は、武斷政治を在るの要ありしこも、亦自ら明瞭であらねばならぬ、寺内伯の朝鮮統治は、内地人に取りては若干迷惑で

あつたであらうが、一千二百萬の朝鮮民族に取りては、過分の文明政治であつた、朝鮮人口を開けば朝鮮は素より文化の國にして、日本の總督政治寺内伯の武斷主義が、其の武斷政治十年間に於て、幾何の文明を發生したりや、不肖按ずるに朝鮮の上古より中世に於ては、支那文明を輸入して、燦然たる光輝を放ちたるこなきに非るも、其の朝鮮文明は就に五百年前高麗の末世に衰退し、李朝に至りては、中世までは漸く其の餘燼を保ち得たりしも、中世以後死灰の如くに滅失して、新たなる文明は興起するの勢なく、二十世紀競争的文化の社會に於て、朝鮮文明の誇嘯すべきもの果して何物の存在したりや、近代科學文明を謂はる、現代的文明の意味に於て、朝鮮は全然誇嘯すべきものを失つて居るではないか。

然るに寺内伯は、武斷政治の壇上に立て文明政治を行ひ、伯の武斷政治七十年間に於て、驚くべき文明の色彩を濃厚にした、文明は何ぞや、文明の要素は何ぞや、米國の學者ペイチ氏は一國文明の特色を論じて、(一)一般民

朝鮮文明の誇嘯すべきもの存石したりや

黨争の慘禍より來りし民の苦痛

の教育、(二)衛生、(三)農業、(四)交通及通信の四色を擧げて居る、之れ即ち現代文明の根本的要素なりと論じて居る。然らば此の四方面より觀たる當時の朝鮮を、前韓時代を比較せば、寺内伯七年の政治が、朝鮮の社會に貢獻せし文明の濃厚なりしは、不肖の今茲に喟々するを要せずして、内鮮人の明瞭に之を了解して居つた事實である、加之黨争の慘禍より來りし生民の痛苦を救ひ、新民に生命財産の安固を與へ、民權を伸張し、義務を尊重せしめ、司法を改善し、土地調査の事業を完了し、信教の自由を與へて宗教心を助長し、工業機關を補助發達せしめ、商業貿易を盛んにし、林業を整理し、水産業を發達せしめ、一般の經濟組織は交通通信の發展によりて、大變革を齎らし、市區の大改正を斷行して、市街の面目は文明的に一刷新せられ、寺内伯が短かき七年間の經綸にしては、眞に案外の成績であつた、不肖等は現今の朝鮮人と共に大に感謝すべき理由がある。不肖思へらく、併合は既に朝鮮の大政變である、廢邦の大整理に着手せら

れ、文明に指導せらるべき運命に遭遇せる朝鮮にしては、朝鮮民族の各階級を通貫して、一齊に之を満足せしむるの施設は、到底之を僅少年月の間に望むことは出来ない、朝鮮人は從來兩班儒生と普通民との間には、驚くべき階級があつて、我維新前の武士と町人百姓のそれと相似たるものがあつた。

各種の官吏は文官武官共に兩班の特權に委し、各種の産業は兩班の特權に委し、常民は官職と利潤に與からず、辛ふして其の餘瀝を舐むるに過ぎなかつた、然るに總督治下の典章は、先づ階級制の大關門を突破して、四民を平等にし、産業の自由を認めて兩班の特權を禁制し、民權大に伸びて宛かも維新後の日本の如く、從來唱々として專政と兩班の壓迫に縮まりし町人百姓は生氣潑刺又昔日の面影を留めざるに至りて、兩班は之を武斷政治の壓迫と稱し、常民は之を文化政治の恩澤として恐悅したが、寺内伯の官紀振肅の嚴格なるは滋薪を束ぬるが如く、法令訓達の軍隊式なる名に於て、畏懼したるあるは事實である。

總督治下の典章は階級を破壊して四民を平等にする

寺内伯一代の官紀を振肅す

寺内伯が滋薪を束ぬるが如き官紀の振肅には大に理由があつた、韓國の末年我保護政治のとき、立憲政治家として好評ありし伊藤公が、酒食饗宴に耽りて、統監府を待合旗亭と同視し、朝鮮の事業に手を出さむとする資本家も幫間的小人の仲介あるに非れば、能はざるが如き状態に於て、統監府大小の官吏が墮落腐敗して、韓國官吏と擇ぶなきに至り、官紀の紊亂其の極に達せしとき、寺内伯が一代の嚴格を以て官紀を振肅し、不正惡徳の吏を逐ふこと猛虎の群羊を驅るが如く、昔年ならずして官界の空氣は緊張した、それは官界ばかりでない、民間に於ても政商横行し、空權を流る虚業者跋扈し、横領奪占を恣ま、にせしもの、一時に其の影を潜めた、或識者當時之を評して曰く、伊藤公は春官の如く、寺内伯は秋官の如し。

思ふに寺内伯の時代に於ける朝鮮の状態は、朝鮮人のみならず、日本人にも一種の威力と嚴格を要するの己むを得ざるものありしは、不肖等の確實に之を認むる所のものである、寺内伯の秋官振りには、京城の操觚界と民間

議員を中心として、有力に排斥の聲高まり、就中會社令の發布に憤慨したる實業家は、所在に寺内伯呪ひの聲が舉り、武斷政治を撤廢せよ、寺内伯を葬むれ云ふやうな過激の言論が、絶へず京城と東京の間に徘徊した。寺内伯は毅然として驚かない、蚊の鳴くほごにも感ぜなかつた、不肖は韓國併合の前年京城に來り、寺内伯總督施政初年より、言論文章を以て生活し常に冷靜なる態度に於て筆政に従事しつゝ、ある、寺内伯が四面楚歌の中に立つとき、不肖は挺身筆劍を磨して寺内伯の武斷政治を謳歌した、武斷可也、微温的なる可からず、會社令發布せよ、虛業家の跋扈を取締らざる可からず、狂論した、各種の方面に於て紊れたる社會、併合直後天下騒然として兩班貴族の階級亂を思ふの社會、在鮮日本人民は植民地氣分の旺盛にして、切取り強盜的不道德人の跋扈せし社會に處して、寺内伯の武斷政策は臨機應變の機宜の政策たるを失はなかつたことを、不肖は痛切に之を感ぜしを以て、不偏不黨の議論を行つたに過ぎない。

挺身筆劍を磨
して寺内伯の
武斷政治を謳
歌す

帝國治鮮の大
方針たる内鮮
人劃一の政治

不肖は寺内伯の武斷政治が、其の名の如く而して輿論の如くに、左様に武斷壓迫して朝鮮人を虐遇し、日本人の利益と幸福を度外視したことは思はない、寺内伯は朝鮮人を確實に保護し、普通教育及實業教育の機關を設けて文化に導き、其の利益と幸福を増進し、速かに日本人と同等の地位に進めむと腐心し、寺内伯は民を愛するが故に嚴格に、治民の範を示すべく官紀を極端に振奮した、若し夫れ在鮮日本人が二十年來養成し來りし自治團體たる、居留民團を撤廢したるを以て壓迫と評さば、帝國治鮮の大方針たる内鮮人劃一の政治や同化の事業は行はれまい、不肖も民團自治の撤廢は二十年は早いと考へたが斷乎として行へば劃一政治は曲りなりにも行はるゝ、會社令の發布の如き當時は實業界の議論囂々たりしも、世が不景氣の今日銀行は破綻し、造船所は失敗し、會社が閉息したる今日になつて見れば、何人が之を立て直して呉るか、母國財界が現今累卵の如き危機に立つとき、朝鮮の銀行會社其の他の事業界が、貧乏搖ぎもせないのは、寺内伯が往年會社令を設定して、堅

實に認めしもののみを擇んだ保護政策の賜ではあるまいか。

寺内伯が當時若し一代の好評を念じし、やれ銀行、やれ會社、やれ新聞機關、如何様企業家の言ふなり放題に認可してゐたら、今頃は定めし朝鮮財界の機關は、將基倒れになつて居つたであらう、凡そ政治家の事業は一旦にして毀譽褒貶を既定す可からず、十年二十年五十年の後を見なければならぬ寺内伯は實に放膽的に經國策を立て、之を痛快に實行せられたる武斷の政治家だつた、而も堅實にして輕兆浮薄ならざる文明政治を行つた總督であつた。

世人は伯を武斷主義の非立憲的總督であつたとか、單なる一本調子の政治家であつたとか酷評して、暴君政治の代名詞してゐるが、不肖をして評せしむれば、世の評論者が單調なのだ、我殖民地統治の要諦は、治者が立憲云ふ名に囚はれて、何んでも彼でも人民の自由でさへあればよい云ふ論法で文弱政治を施すのはよくない、正當なる自由も不正當なる自由も一束して構

寺内伯は放膽的に經國策を立てた武斷の政治家

高貴なる犠牲を拂つたと思へば人格に欠損なし

はない云ふ論法は駄目だ、正當なる自由は文明人の懇求する所なるも、不正當なる自由は嚴重に之を拘束す可しだ。

寺内伯は多く此の不正當なる自由を排斥し取締つたが、誤まつて正當なる自由も束縛されたものもあらう、日本人は憲法治下の國民だ、正當なる自由を束縛せらるゝことは忍ばれない、そこを忍ぶのは一千二百萬新附同胞の統治の爲め、高貴なる犠牲を拂つたと思へば、人格に欠損なく、寧ろ高尚なる道義の發祥だ、怒ることも無ければ、訴ふることもない、日本人にはかうした義侠の動きが、即ち民族性の花であらうぢやないか。

以上不肖は寺内伯の功業も罪業も併呑して之を論じ、世人の滔々として誤れる寺内論に其の頭上より巨石を下し、武斷政治の成敗を闡明することには、文弱の風滔々たる文化政治の、毒にも薬にもなるであらう、不肖は其の積りで之を後世に傳ふるのだ、治者も被治者も讀で貰はねばならぬ。

第三篇 寺内伯の法治主義

— 專制政治決して不可ならず —

統監政治を按ずるに、朝鮮に於ける司法制度は、保護政治時代の施設に改善の端を啓き、次で司法事務委託及韓國併合に伴ふ前後二回の變革を経て、現今の法院制度になつた。

是より先、明治三十九年伊藤統監は、司法制度の確立を以て積弊を拯濟する最先の急務をなし、韓國法部に内地人の參與官一人、主要なる裁判所に内地人の法務輔佐官又は法務輔佐官補各一人を備聘せしめて、司法事務の指導誘掖に膺らしめた、然るに當時韓國に於ては、行政司法の混淆甚だしく、司法機關は初審裁判所たる漢城裁判所及終審裁判所たる平理院の外、何れも地方廳に併置せられ、裁判官は概ね地方官之を兼ね、賄賂公行して法權亂用せ

維新時代の
司法制度

公然賄賂を督
促するが如き
奇習

られ、裁判事務の紊亂は名狀す可からざるものがあつた。

賄賂は地方官吏が第一の財源であつた、刑法は明律及特別に規定せられたる法令に據り、民法は大典會通及裁判の先例に據り處斷すべき筈なるも、實際は賄賂の厚薄によりて決せられた、特に郡守の收賄は最も甚だしく、無罪の良民富者を捉へ來りて之を收監し、公然賄賂を督促するが如きの奇習を馴致し、賄賂納まらざるまきは、之を拷問して死に至らしむるまきすらあり、之を監舎に投じて食を與へざるやうの事は、平氣で行はれて居つた。

明治四十年七月の日韓協約に依り、伊藤統監は司法事務を全然行政事務より分離せしめ、同四十一年八月内地の制度に依り大審院、控訴院、地方裁判所、區裁判所の名稱を襲用し、三審制の裁判所を開設し、之に檢事局を附設して、内地人を判檢事書記に任命した、然れども朝鮮人官吏の曲法收賄は容易に之を改むるまき能はず、依て遂に明治四十二年七月司法權を帝國政府に委託した、仍て帝國政府は統監府裁判所令を制定施行し、大審院を高等法院

を改稱した。

日韓併合後總督寺内伯は、先づ從來諸外國人が韓國に對して有せし治外法權を撤去し、内鮮人外國人の別なく、一齊に帝國の司法權に服せしめ、茲に全く裁判機關の統一を見るに至つた。

寺内伯は朝鮮社會の荒廢ミ、人心の墮落が其の極に達せるを觀察し、尋常の治民策にては治安維持の困難なるを自覺し、嚴然たる法治主義を採るは時代の要求なりミなし、朝鮮民族心の墮落惰眠を革新するを政治の目的の一なりミ考へた、寺内伯は軍帥であるが、又實行的政治家であつた、秦の始皇見たやうな痛快果斷の治者であつた。

秦國の富強を致したる所以は、法治主義が直接政治に好影響を與へたからであつた、秦の宰相商鞅は、秦國を改造して模範的法治國とした、秦國の法治主義は東漢の末年に至るまで、四百年も秩序ある發展を續けて、最後に有名な蜀漢の政治家諸葛孔明のやうな人が、法治主義の篤信家として當代に照

朝鮮民族心の墮落惰眠を革新するに政治の目的

耀した、が秦の法治主義も蜀漢の法治主義も、法律の權力は君主に淵源すこと論じて法權を過信した結果、月に年に衰微して了つて、法治主義は活躍の力を失つた、其の理由は學說上の異論にも原因したであらう。

我日本の立法權は如何なる人に有るであらう、君主に有るか、國家に有るか、我帝國は支那の法治主義が、君主萬能の主張より破壊されて失敗したる歴史に鑑み、立法權は國民の選良に依て議定せられてゐる、乃ち民衆的法治主義でも謂ふ可きか、頗る合理的である、寺内伯は此の合理的法治主義を朝鮮治安の爲に發揮せむとし、憲兵制度と相提携して、縱横無盡に其の嚴格振りを發揮した、世人は之を武斷と謂ふのであらうが、朝鮮人民は我法治主義に信頼し、武斷政治が邪道を破り邪人を取締り、悪人を懲息するの治法にして、殖産興業により國利民福を圖るの治法に安心し、朝鮮人民は舊韓國の人道と生活を無視せし無道の法治より脱出し得たるを狂悦した。武斷は果決を意味し、文弱は反對である、武斷は苟もせざるを意味し、

文弱の妥協苟合は反對である、武斷は嚴正緊張を意味し、文弱の馳緩は反對である、寺内伯の武斷政治は、徹頭徹尾緊張せる態度を失はずして、治鮮の要諦を攫むて居つた、寺内伯は實に善意誠心法治主義を發揮した人である、寺内伯が若し當時に於て、寛大無限の政治政策を以て朝鮮統治の要諦としたならば、朝鮮民族は決して今日の如く比較的緊張せる道徳心を保ら得なかつたであらう、民を愛するが故に寺内伯の査配下に在りし司法官は、寺内伯の政治道徳に準據して、斷じて法を曲げなかつた、故に我司法權は人民の信用を受けて、其の威嚴を保ち、司法官は神の如く敬せられ、人の如く愛せられて居つた。

寺内伯は斯く渾身の善意誠心を朝鮮の統治に傾注した、武斷政治を惡政に評するところは頗る過酷であらねばならぬ、然れども試みに當時總督府の吏僚に就きて、寺内伯に對する所懐を叩くに、其の嚴正格勤なる寺内伯に對し、少しも悅服せざりしは、寧ろ不肖の意外ミせし所であつた、殊に多少の經綸

寺内伯の政治道徳に準據して法を曲げなかつた

あり抱負ある人物は、不平滿々にして、只一日を苟安に過ごせば足れりとするの風であつた、又所在の有志實業家の意見を叩けば彼等は一齊に總督政治の非を鳴らして、寺内伯の更迭を見るに非ずむば、朝鮮の發展は期待す可からず公言した。

然るに寺内伯は、入りては能吏の傑出せんことを冀ひ、出でては資本家の活動を開始せむことを祈つて己まず、又常に人材の背いて躊躇せむことを憂ひ事業資本家の便宜を得ずして志を伸ぶる能はざるを氣遣つて居つた、然らば其の心を用ゆること斯くの如くにして、絶へず惡評を浴びせられてゐたのは何う云ふ譯であつたか、不肖は寺内伯の武斷政治を評し、其の是非を論ずるには、從來頗る慎重の態度を執つたが、不肖をして一言に之を評せしむれば寺内伯は天下をして天下を治めしむるの民衆政治を爲さず、寺内伯一人の力を以て天下を治めむとした、寺内伯は民衆的政治を行ふことを爲さずして專制的良治を發揮せむしたからである。

寺内伯が惡評を浴びせられたるは何う云ふ譯か

伯の專制的良治が徹底したら、專制決して不可ならず、不肖は久しく我政黨政治の没落を祈り、頭數政治の弔鐘を打たむき待ち焦れて居るものである。現代のやうな議會政治を否定したいのだ、寺内伯は聖天子の名代で、我政黨政治の圈外に於て、自由に專制政治を敢てし得るの立場である、寺内伯にして賢明なる政治家であるならば、不肖等は政治の倫理化を朝鮮に直觀するこゝが出来て、洵に愉快であらねばならぬ、政治は王也、政治は乃ち倫理也、朝鮮の如く内鮮人混合し、或意味に於ける複雑なる社會、文化は遅れたる社會に於て、直ちに政黨政治の產物たる自由民權を極度に鼓吹することは、我儘勝手を勸奨するこゝとなり、非政治の極であり、非倫理の極を謂はねばならぬ。

此の意味に於て寺内伯の專政は公平であり、且つ統制がなからねばならぬ公平なる政治、統制ある政治が行はるゝならば、不肖等は寺内伯の武斷政治を謳歌せなければならぬ、不肖は現代日本の代議政治がほゞ厭やになつ

政治は正也政
治は乃ち倫理
なり

政黨政治を政
道とするの吏
僚

てゐるのだ、寺内伯の專政に依て朝鮮が立派に統治されてゆくならば、それは直ちに我政黨の模範となるべき理由がある、云ふやうなことを考へて居つた、法治主義は寺内伯の嚴正に依て、立派に威嚴を信用を保ち得た、政治は頗る公平に且つ倫理的に行はれた、此の分ならば寺内伯は朝鮮統治の成功者である。

然るに寺内伯の統治の機關に據りし各部長官や地方長官は現代政治學に養はれたる政黨政治を政道とするの吏僚のみであつた、故に彼等は寺内伯の專制的命令を監督に服せなかつた、否表面は唯々として服従せしも、裏面に於ては赤い舌をペロリと出して居つた、そして寺内總督は内鮮人社會の相互監督の本義を知らない、經濟界は經濟界に活動する人物相互に監督せしむれば宜しい、政治は政治的人物相互に之を監督せしむれば宜しい、風教は社會の公眼を以て監督せしむれば宜しい、然るに總督は明石將軍を監督し激勵して民間の經濟、風教、言論等總てを監督せしめて、社會に一惡事一弊害の行は

る、なきを期せむとするも、それは到底駄目だに揚言して居つた。

寺内伯や洵に勞せし哉、而も寺内伯の專政は吏僚の倦怠に依て徹底せなかつた、吏僚の面従腹背に依て徒勞に歸した、さりながら我司法官のみは、寺内伯の嚴正なる督勵に因て、獨り太陽の如くに朝鮮の國土に人民を照らして居つた、嗚呼惜む可き哉、寺内伯統制の力足らず、日本國民本然の政道を朝鮮に行ふ能はざりしと雖も、法治主義の上には慥かに成功者であつた。

凡そ政治は民族心理の寫眞である、武斷政治であらうと、文化政治であらうと、總べて民族心理の積極若くは消極の表現ならざるものはない、積極的表現は其の民族に一種の政治理想があつて、之に到達すべく努力するのであらねばならぬが、併合後朝鮮民族の政治理想なるものは、治者たる帝國及帝國民族の政治理想と同化せなければならぬ所に、統治者たる寺内伯の苦心の存せし所は觀取するに可き出來る、併合後當時の朝鮮民族は寺内伯の政治に満足して服従し、法治主義の不偏頗にして、其の威嚴ある制裁には朝鮮人民

凡そ政治は民族心理の寫眞なり

民族心理の根本的改革

は精神より服従した。

寺内伯の武斷主義は、即ち法治主義の別名でも云ひ得る、伯は法律の下に在りては、謂はゆる愛憎なるものなく、謂はゆる仁も無ければ不仁もなく民を愛せしが故に其の法は曲けず、朝鮮民族政治の改革には、民族心理の根本的改革が必要であるに信じたからだ、民族心理は導きやうで發達もすれば變化もする、がすべて歴史上の遺傳が其の根核となるのだ、寺内伯は實に其の遺傳政治に民族心理を胸に收めて、臨機に法治主義を最も強く發揮したのであつて、恰かも新築家屋の庭園に一粒の柗種を播種して、それが年一年に生長し、遂には鬱然たる大樹となり人をして其の蔭に憩はしむるが如く、寺内伯の法治主義は、武斷政治十年間に於て、燦爛たる光彩を放つた、そして朝鮮の改造に活動したる法治主義は、濟世安民の大道であつた。

第四篇 寺内伯に蹂躪されたる移民策〔一〕

——寺内伯無資本者浪人を驅逐す——

日韓併合後、勢ひに乗じて内地人の朝鮮に流入せしもの、在來の先住者も合せて大正元年には約二十五萬人に達した、凡そ國民の生活には二様の意義あり一は世界的發展を爲して他の國民と融和すること、二は飽くまで固有の國民性を保持し、他の國民と融和する間にも、日本人固有の大和魂を磨損せず、進むで之を發揮することである。

健全なる國民の生活の上には、遺憾なく此の二様の意義を發揮せなければならぬ、而して我政治家の須臾も忘るべからざるは、我國の地形外方に伸びずむば、遂に島國主義を以て終らなければならぬ、我國民は外方に發展せざれば、到底其の大を爲し強を爲すの性格を有せない、而して我大陸發展に於

日本人固有の大和魂を發揮すべし

寺内伯の留意せし所のものは朝鮮産業の開發

て、其の地盤を保養する第一着手は、朝鮮に於ける我移住的發展であらねばならぬ。

思ふに朝鮮經營は我大陸發展の第一歩である、我海島の日本人が大陸の一角を新領土としたる以上、日本内地に漲り溢る、青年を驅て、大陸殖民を計らねばならぬ、是故に桂公等は統監政治時代より、東洋拓殖會社を創立して朝鮮の拓地植民を計劃實行しつゝあつた、併しながら寺内伯の留意せし所のものは、朝鮮産業の開發であり其の發展策であつた、寺内伯の總督就任後、世は偶然にも不景氣の風吹き捲くり、それに寺内伯の嚴正なる緊張振りも、法治主義の活動も、會社令の發布によりて、在鮮内地人の思潮は著しく沈滞し、意氣の振はざることは夥だしく、都鄙を通じて情氣滿々の状態であつた而してその思潮の沈滞鬱屈は、無數の失業者を出し、其の上日本内地よりは併合の勢ひに驅られ、徒手空拳にて成功を夢みたる青年も老年も、續々して渡來したので、寺内伯は面喰つた。

憲兵や巡查
より逐ひまく
られた

寺内伯の意中を付度するに、伯は朝鮮の産業を開發し、其の經濟的地盤を整理せなければ、我移住民を容るゝの餘地はないと考へられたであらう、それも一理だ、之れを見ても寺内伯は武斷政治家と銘打たれた總督に似合ぬ、案外正直な政治家であつたことが窺はれる、此の理由を以て伯は我渡來者浪人を忌むこと蛇蝎の如く、如何にして之を驅逐せむか苦心された、資本家實業家は大は歓迎せられたるも、無資本者虚業者は憐憫たる目に逢ひ、憲兵や巡查より逐ひまくられた。

凡そ殖民地に來りて經營せむとする者、資本を携じて來る者は着實なる實業家である、無資本にして來る者は自己が強健なる腕一本にて生活の根底を拵へ、奮闘活動して一家を興し、一業を爲し、以て殖民地の橋舞臺に成功せむと志せる青年である、其の成功の道程に於て不幸遊食浪々せりし雖も、之れ無資本者の當然遭遇すべき徑路であらねばならぬ、今日の浪人は將來の大起業家であり、大實業家である、サンタローザの長澤鼎も、朝鮮の香椎源太

優勝劣敗の眞
理は争ふ能は
ず

郎も之皆素浪人の成業でないか、然るに寺内伯は遊食浪々の無資本者にパンを與ふるの途を講ぜずして、之を忌憚し之を驅逐せむと苦心したことは、不肖等の大に其の意を得ざる所であつた。

在昔一時我學島の青年、奮闘的生活、自由手腕を揮ふべく北米に志した、年々流れ出でし我無資力、無資本の青年は實に夥だしく、米國は大に之を警戒して、我無資力者の渡來を極力妨げしめた、而かも爾後如何の狀ぞ、優勝劣敗の眞理は争ふ能はず、奮闘活動の青年は、皆各々其の處を得たではないか、方今世界何れの處にか、無資本者の渡來を眞向より防かむとするの政治家有りや、曾て米國が我勇敢にして勤勉なる青年の確乎たる地盤に恐れを生じ、遂に學童問題や、土地所有權問題や、種々雑多な外交問題が惹起したので、故小村外務大臣は斷然として、日本移民の滿鮮集中を論じ、政府は爾來漸次此の方策を實行するこゝ、なり、遂に東洋拓殖會社なきの實現を見たのではなかつたか。

我移民の滿鮮集中ミは何ぞ、米國に去るの移民、も朝鮮に來るの移民も大して優劣あらう筈はない、五十歩百歩だ、其の無資本にして奮闘活動して、其の運命を開拓せむに於ては、其の素志に勿論變はりはない、而して我朝鮮に來りし滔々たる移民は、實に我政府の方策たりし滿鮮集中論に正直に服従し、共鳴したる青年血氣の自由移民であつた、來て見れば案に相違し總督政治の壓迫に呆然として、逃げ歸りし者は數知れぬ夥だしきものがあつたであらう、而してそれは無資本者ばかりでない、資本家實業家も、會社令ミ云ふ監視付に驚かされて、惜氣もなくすん／＼朝鮮を見捨て、去つた。

寺内伯は、三軍を叱咤するの凄まじき勢を以て、朝鮮の交通を自由にし通信を敏速にし、産業開發の準備を整へて、座を清め席を設けて、内地の大本家實業家を勸迎せむせられたるも、内地の資本は一向に朝鮮に動いて來なかつた、それは餘りに寺内伯の嚴格なる監視の目が動き過ぎたからであつた、茲に其の一例を擧ぐれば、寺内伯は大正二年八月、小農保護に就て各

青年血氣の自由移民であつた

一般社會の改良進歩を妨害す

道長官に訓達して曰く。

「前略、由來朝鮮には大地主跋扈し、是が爲め自作農民は甚だ少なくして地主農民の多くは何れも小作に従事するの狀態にあり、換言すれば大地主ミ小作人ミの階級に分たれ、即ち田畑を所有して以て自營自耕しつゝ、ある農民に乏しく、之が爲め所謂社會組織の中堅を缺如し、延ては産業の興隆發達ミ、一般社會の改良進歩を妨害し來りたること甚だしきものあり、茲に於て農事を獎勵して地方農民の収益を増加し、堅實なる地方の經濟的發展ミ、一般社會組織の改良發達を期せむとするには、自作農を保護獎勵し専ら是れが増殖を計らざる可からざるなり。

然るに近時朝鮮の農事有望なるを看取し、内地人の巨資を擁じて是れが買収に従事する者次第に多きを加へ來るが如し、余は實際の資本家にして堅實なる施設經營を行はむとする者に對しては、必らずしも之を喜ばざるに非るも、爲めに土地兼併を生ずるが如きことなきかは憂慮に堪へざるな

地價暴騰して
一般經濟界を
攪亂す

武斷政治時代 第四篇 寺内伯に蹂躪されたる移民策

り、如何になれば古來大地主の跋扈し來りたる朝鮮に於て、更に大地主の増加を見るに至り、所謂土地兼併の弊は益々滋生し、地方農民は永遠に疲憊より起つ能はず、従つて農事改良、地方經濟の發達、社會組織の改善は遂に望む可からざればなり、況んや彼の無資本にして更に農事經營の意思なく、此機會に乗じて單に一時的奇利を博せむが爲め、土地の買収に従事せるものあるに於てをや、若し夫れ斯の如き投機者流益々跳梁せむか、地價爲めに昂騰して一般經濟界を攪亂し、更に一方着實なる農事經營上に惡影響を及ぼすのみならず、由來勤儉貯蓄の觀念に乏しく、較もすれば一時の安逸を食ほらむとする朝鮮人、中小農民は直ちに眼前の利益に眩惑し、爲めに祖先傳來の田畑を放賣して顧みず、遂に自家百年の長計を誤まるもの少なからざるべし、現に是等の傾向無きにあらず、是れ余の寒心に堪へざる所なり、左れば余は是等の傾向を未然に防止し、以て中小農民を保護し、所有權の保存を計り、營々其の業に勵ましめ、以て農民の富力を増進

朝鮮に於ける
農事の萎微衰

武斷政治時代 第四篇 寺内伯に蹂躪されたる移民策

するに努めざるべからざるなり、今や交通機關の整備に伴ひ、産業の發達著しく、従つて田畑の價値は益々加はらむとする時に際し、濫りに之を放賣するが如きは、思はざるも甚だしきものにして、又實に彼等は好んで恒産を手放し、遂に居所を失ひ一家離散して、悲愴なる境遇に陥るの時あるを知らざるものなり云はざるべからず、斯くの如きは新附國民の一大不幸なるのみならず、又實に朝鮮に於ける農業の萎微衰頽を招き、更に社會組織をして益々薄弱危殆ならしむるものにして、農政上に於て寸時も閑却すべからざる所なり、是れ余が一方移住農民に對しては出來得る限りの便宜を保護を與ふるに踴躍せざるに同時に、鮮人小農を保護し、投機者流の跋扈跳梁を、土地濫賣の弊を防かんとする所以なり云々。

寺内伯の訓令や、實に公明正大なる政治家の金言である、不肖等苟くも書を讀んで文事を解する者、此の治民の金言を搏撃するの蠻勇は發揮したくないが、之れは寺内伯の理想である、政治家の空論である、寺内伯の武斷主義が

永久に徹底的に發揮得らるゝならば、伯の理想の實現は敢て困難ではあるまいが、さもない限り現代の人間社會には、之は空論に始終するであらう、不
是は寺内伯の此の理想論が、實行の出来ない理由を實際の世相より論辯して
見やう。

第五篇 寺内伯に蹂躪されたる移民策 [二]

土地兼併の趨勢と寺内伯の躍起

按ずるに、大地主の跋扈し、自作小農の次第に減少しつゝ、あるは、豈朝鮮
のみの状態ならんや、英國に於ても獨逸に於ても、佛國に於ても、其の他各
文明國に於ける、殆んど共通の現象である、我母國に於ても實に土地兼併の
弊風は盛んなる状態を呈しつゝ、ある、我農林省の調査せし全國農事統計を見
れば、四町歩五町歩以下の土地所有者は次第に減少して、五町歩以上又は五

土地兼併の趨
勢と寺内伯の
躍起

土地兼併の大
勢は之を防ぐ
能はず

十町歩百町歩二百町歩の土地所有者の数は、次第に増加し、あるではないか
小地主の斯く大地主に兼併せられ、農事を捨てて或は都會の勞働に従事し
或は又別に其の大地主の小作人として、引續き農事に従事するものもあるも
大體に於て自作小農の次第に減退し、小數大地主の手に歸せむとするの状態
は、滔々避け難き現時の趨勢を謂はねばならぬ、彼の英國に於ても獨逸に於
ても、土地の兼併に就ては各種の豫防を講じ、小農保護及農事勞働者の保護
に就ては、其の設備は完全に近きものある由なるも、如何せん土地兼併の大
勢は之を防がんとして防ぐこと能はず、各文明國は各々其の弊を知るも、人
類の向上發展と生存競争とは如何にもする能はず、強て之を防歴し、禁遏せ
むとするは經世家の愚策ではあるまいか。

先進文明國の農夫は、何故に土地を放賣しつゝ、ありや、我母國の小農は何
故に大地主に兼併せられつゝ、ありや、而して朝鮮の小地主亦何故に土地を放
賣しつゝ、ありや、是等は一時の宴遊苟安を貪ほらむか爲めであらうか一時の

宴安を食ほつて祖先傳來の田地を放棄せむとするの痴漢も、たまには無きにしもあらざるべきも、斯くの如きは當世至つて稀れなる状態にして、此の現象を醸成なるものは、實に生活問題である、我母國に於ても農家の負擔は日に加はりて、日常必需の資に窮し、生活の困難甚だしきより、次第に大地主に兼併せられつゝあるは、顯著なる事實ではないか。

加之國家は此の大地主を盛んに優遇し、多額納稅者に稱して、貴族院議員にすら參列せしめ、人間の名譽心を煽つてゐる、舉世滔々として大地主たり將た獨占事業を企つる者の増加し來るは、蓋し當然の歸結ではあるまいか、然るに拘はらず、一方に於ては土地の兼併を防遏せよと云つた所で、それは矛盾の甚だしきものである、朝鮮に於ても實に然りだ、多額納稅の大地主は社會的に種々の優遇を受けつゝある、寺内伯が朝鮮小農の土地放棄を目して地價騰貴の影響を速断したることは、不肖は之を伯の盲斷を評したい、否寺内伯ばかりでない、現今の文化政治に於ても、不肖は此の見解を否認する材

舉世滔々大地主たり獨占事業を企つるは當世至つて稀れなる現象を醸成するものは、實に生活問題である、我母國に於ても農家の負擔は日に加はりて、日常必需の資に窮し、生活の困難甚だしきより、次第に大地主に兼併せられつゝあるは、顯著なる事實ではないか。

料は持合はしてゐる。

大體人類の向上發展、人間社會の生存競争は、經濟政策の定規にはめてのみ取締る譯にはゆかない、經濟上自然の趨勢を動かすには、經濟純理にあてはまる所の、巧妙なる政策がなからぬばならぬ。

寺内伯が、朝鮮新領土に健全なる社會を作るべく、先づ土地兼併の弊風を防がんとせられた事は、不肖も敢て異論したくはないが、資本の動く所、民族の開大發展する所、土地國有を斷行するに非るよりは、恐らく兼併の趨勢を防禦するこゝは困難である。

我資本家は、寺内伯の禁制を犯して、土地に投資し買収の手段を巧妙にした、寺内伯は之を聞いて躍起を爲り、警務總長に此取締を命ずれば、總長は直ちに警察部長に嚴令し、警察部長は之を憲兵に嚴達すれば、憲兵は目を光らして巡察し、朝鮮の農業者にして、若し内地人に土地を賣る者あれば、憲兵は直ちに分隊又は分遣所に同行して、或は詰問し、或は懇々之を説諭した

寺内伯躍起と爲りて警務總長に取締を命ず

農民が祖先傳來の土地を賣り拂ふに云ふことは、決して容易の事でない、彼は生存競争の猛烈に堪へ兼ね、虚飾文化の弊に苦み、経済的に敗残し、落伍したる結果、祖先の土地を賣るの没徳と恥辱を顧みるに遑なく、内地人に放賣し、其金を利用して局面を展開せんことを企てるものが多数であつた。

然れども憲兵は容易に之を許さず、警へば一町歩の土地を賣却せんことを者あれば、先づ其借金の程度を調べ其農民の素行を調査し、己むを得ざるもの認められたる者も雖も、或は三反或は五反歩を切り賣り得るに過ぎなかつた。

然れども、此農民は決して殘餘の賣却を斷念する者に非ず、時機を見て再び賣却せんことに、種々巧妙の手段と方法とを探るに至り、二回三回に分割して賣却するまでには、彼等は既に憐れむべき境遇に落ちて、遂に流離顛沛を餘義なくせざるを得ざるに至つた。

寺内伯が、土地兼併を防がんさせられたる精神は、經世家は勿論歡迎した

農民が三反歩
五反歩の切り
賣

には相違ないが、寺内伯の豫期は大に裏切られて、一面に於ては農村は疲弊し、一面に於ては、内地人の朝鮮農業に志を抱いて渡來せんとする者の風潮が、全然冷却してしまつた。

不肖は無論經濟學の純理より遠ざかりて論じたくはない、又社會政策や、經濟政策を無視して論議したくもないが、伯の經世策が、動もすれば、實情に遠ざかり、日本人の大陸發展に、大なる支障を與へつ、あつた事に、我與論は翕然として反對したのであつた。

要は現代土地の兼併は、生活上經濟上の自然の勢ひにして、幾分なり之が寛和の途を計るには國稅の負擔を減少し、低利資金の供給を圓滿に敏速ならしめ、一面に於ては文化普及の弊に苦しむ、鮮農民の生活程度の向上を防ぎ、更に一方に於ては虚飾品、贅澤品の輸入を防遏するにあり、是れ之を講ぜずして、單に土地の放賣を警戒し、其の兼併を防壓せむとするも、それは爲政者の徒勞であるを評せざるを得ない。

國稅の負擔減
少と低利資金
の供給

朝鮮經營の大
眼目は拓地植
民にあり

斯くて寺内伯は、明かに我が資本者無資本者の渡來を拒みしに共に、又我大資本家の渡來をも防遏されたに云ふ結果に陥つて了つた、寺内伯の此の方針は社會合意に憤慨して、東京地方の我實業家は、寺内總督の在鮮中は朝鮮には手は出さぬと放言したことを不肖は記憶してゐる、嗚呼苟くも我資本家が資本を擲じて朝鮮に來るもの、農事經營を措て何處に着實なる事業があるか、漁業も鑛山業も勿論可ならざるに非るも、不肖等は朝鮮經營の大眼目は、實に拓地殖民にあることを信じて居る。

伯の在鮮中我大資本家が來りて農事經營の準備を爲し、百町歩二百町歩以上の土地を兼併せしもの果して幾何ありや、指を屈すれば實に寥然だ、不肖は當時我大資本家が續々來りて、五十町歩百町歩の土地を買収し、着々改良して又一面に於ては未開墾地を開拓して、其の空疎なる地盤に我質朴勤勉なる農民を植へ付けて、朝鮮農民に多大の模範を示さざりしを遺憾に思つてゐる朝鮮は廣袤一萬四千方哩を有し、其の人口は當時僅かに一千二百萬、其の

政府の移民策
と寺内伯の開
墾策が正面衝
突

一平方里の人口は、内地の密度に對比して、十分一にも及ばなかつた、そこに着眼したのが桂公や小村侯であつた、東洋拓殖會社は當然起らざるを得ない幾多の理由があつた。

東洋拓殖會社は政府の贊助の下に、朝鮮の拓地殖民に従事してゐたのである、東拓は着々農地を買収した、既墾地も買収すれば、未墾地同様のものまで攫ませられたが、東拓は清濁併呑主義で其の事業を進めた、茲に來つて我政府の滿鮮移民方針は、寺内伯の政策は水炭相容れなかつた、即ち政府は移民集中主義を取りしに、伯は開發策に腐心し、土地の放賣を防遏し、我移民の渡來を防歴した、政府の移民策は伯の開發策は、半島の分野に於て正面衝突を惹起した、咄々何等の怪事ぞや、思ふに内地人の増加するに従ひ、自然の勢は既耕地をも買収し、未耕地を開拓せなければならぬ、我滔々溢れ出つる内地人を朝鮮にも適當に按配せなければならぬことは、議論するだけ野暮だ。

汝は土にかぢり付いて居れ

我明治維新の直後、其の志經國濟民にありし副島種臣伯は、土地國有論を狂唱した、現代よりして之を觀れば眞に達識だ、土地が國有でない限り、私有である以上、私經濟的價値物として、或は時に放賣され、或は時に買収するのは、人間生活の隨機應變の術策に於て、免かれ能はざる趨勢だ、土にかぢり付いてゐて、祖先の地を稱して水呑百姓に一生を終はるものもあれば、土地を賣り其の資金を以て商工業に従事し、大資本家と爲る者もある、徹頭徹尾汝は土にかぢり付いて居れと云ふことが、爲政者の濟民策でもなからう寺内伯は鮮農が土地を放賣すれば、一時安逸を貪ほり、墮落を來すの虞れありと云はれしも、彼等放賣者は更に低廉なる土地を買収し、或は荒蕪地を開拓して、從來よりは倍大の地主と爲つた例も乏しくない。

即ち南方慶尙全羅忠清の各地に於ては、地價は常に北部朝鮮の各地より、二倍若しは三倍の高率を示して居る、故に南方に於て一反歩の土地を賣れば北方に於て二反歩も三反歩も買収することが出來て、收穫には差程の軒輕は

國家經濟に好影響を及ぼすこと甚大

ない、内地人が内地の農地を放賣して、朝鮮の農地を買収しやうと策するのにも、内地の水田一反歩を賣れば、朝鮮では三反歩強の農地が買収出来るのであるからである、然らば内地人の土地買収によりて、朝鮮人は却て安價の土地に移住し、或は其の餘剰によりて荒蕪地の開墾をもなし、朝鮮農地の收穫は各地相平均して、國家經濟に好影響を及ぼすこと甚大なるを信ずると共に我内鮮の住農民は其の風土と氣候を迫ふて、自から國內移民の按配も出來る。

然らば寺内伯が憂慮せられし如く、朝鮮農事の萎微衰頹を招き、或は社會組織をして薄弱危殆ならしむるが如きことは、萬々之有るの理無し、寺内伯が新附の民を愛護撫育せらるゝの情は不肖等は、勿論之を諒せしも、それは伯の杞憂に過ぎなかつた。

第六篇 寺内伯に蹂躪されたる移民策 [三]

——民族的膨脹は世界の趨勢なり——

民族的膨脹は世界の趨勢なり

思潮の沈滞せしも偶然ではなかつた

寺内伯の信念が前述の如くなりしを以て、結局内地人の活動は抑制された普通の内地人が仕事を爲さむとするものは、直ちに投機者流を以て目せられ又小資本を投じて田畑を買収せむとする者、必らずしも一時的奇利を博せむとするもの、みではなかつた、譬へ奇利を博した所で何事の事やある、嗚呼寺内伯は我大資本家の來りて農事經營に着眼すれば、土地兼併の不可を論ぜられ、小資本者の來りて田地を買収せむすれば、投機者流にして憲兵が尾行した、實に手も足も出せない、内地人起業界の眠りしも、意氣の振はざりしも、思潮の沈滞せしも偶然ではなかつた。

此の意氣の不振思潮の沈滞は、國民の墮落生活難を惹起し、延いては官吏

も教育者も宗教者も、殆んぞ沈黙し萎縮して了つた、之れ實に我移民策も寺内伯の開發策との衝突に因るは勿論である。

吁民族的膨脹は世界の趨勢也、韓國併合は何の爲に行はれたか、寺内伯は朝鮮の社會を整理し、産業を開發して、朝鮮を母國製造工業の原料地として速かに母國の經濟的利益を計らうと考へられたのではあるまいか。

大陸發展は日本帝國の國是である、我移住植民の開大なくして、大陸發展も云ふもそれは空名である、寺内伯は空名を攫んで總督の権力も威力さへ保つて居れば、三尺の劍で大陸發展は結構だと思つて居られたかも知れぬ、そこで關東都督なきは何うでもよいとして、遙かに滿州北京まで政治圈を延長し段祺瑞も、張作霖なきも、寺内伯には威敬して歡を通じて居つた。

寺内伯の睨みし所は、世の朝鮮論者や、大陸發展論者とは違つて居つた、朝鮮經營の大眼目は、拓地植民であらねばならぬ、拓地植民によりて朝鮮は自然に開發し、整頓し、文化する。

朝鮮經營の大眼目は拓地植民である

朝鮮の拓地に、産業の開發に、資本家等の民衆的力を度外視して、寺内伯が官憲の力のみを以て、經綸せんことをせられたことは、折角我大陸發展移植民の風潮の勃發に際し、其出鼻を折られたのは遺憾であつた。

遊澤男の如きも、其出鼻を折られた一人であらう、岩崎家の如きも其出鼻を折られた一人であらう、大小の資本家悉く然りである、内地延長主義を云ふことは、今始まつた事ではない、寺内伯は政治の形式に於ては夙に内地延長主義であつたが、其實際は植民地統治主義であつた、伯は速かに朝鮮の財政を獨立して、植民地より利益を上げよう云ふ積りであつた。

それは和蘭が、十九世紀頃「ジャヴァ」の植民地より、三四十年の間に文武官一切の經費を引き去りて、四億圓の純益を得たこと云ふ歴史が、寺内伯の頭に響いて居つたのではあるまいか、日本帝國の財政は内外共に膨大して國民は其負擔に苦み、國防上必要の施設すら出來ず、焦眉の急に迫られたる國民教育の費用すら削減せられんとする状態に於て、植民地經營に莫大の金を

糜することばならぬ云ふのが寺内伯の持論であつた。

寺内伯は、憂國慨世の軍師で、國家は成るべく金着の紐を引締めて、成るべく多く利益を上げようを策劃された。

十八世紀頃の學者は、多く左様な事を考へて居つた、現代の經世家や、經濟學者は、そんな消極主義に囚はれてはゐない、そんな小學に囚はれてゐては國家は發展はせない、保守云ふことは現代の趨勢に於て退歩を意味する極言すれば衰邦破家を意味する。

日本帝國は、毎年七十萬八十萬の人口が増加してゆく、經濟的地盤の開拓産業の開發、移植民の按配は實に焦眉の急である、寺内伯が資本家の土地兼併を憂慮し、憲兵をして内地人を逐ひ暮くる時代ではなかつた、來る者は拒まず去る者は逐はず、清濁併呑主義で善處の方策を講じて居られたら、今頃は人口政策の上に、産業開發の上に、刮目して見るべきものがあつたであらう。

惜い哉寺内伯は、法三章で朝鮮の政治は行へる時代に法令は雨の如くに亂發し、宛かも軍將が兵卒を操縦するが如く、號令叱撻内鮮人を羈束した、そして喟の音も出せない様にして、監視付で仕事をさせ様とした。

之を要するに、朝鮮移植民は最早政府の事業に非ずして、日本國民自らの力に俟たざる可からず、然るに我國民は從來日本歴史に養はれて、其の眼界を限局せられ、曾て海外發展云云が如き民族的膨脹の海國思想を閉ぢられてゐた、現に日本人の海洋文學としては、山田長政や魚尾助左衛門なきが古傳説に残されてあるのみである、然るに併合後我海島民族は、朝鮮は既に自分の國だ云ふ觀念が先に立て、吾れもくゞ渡鮮を試みたが、寺内伯の壓迫に遭遇して、折角開大せむせし移住思想は茲に頓挫し、我青年は寺内伯の眞意を、朝鮮の事情を知らずして逆戻りし、我政府の移民策は完全に蹂躪された、爾來我海島國民の朝鮮移住思想は殆んど勃興するなくして、伯の統治時代は過ぎた。

日本人の海洋文學

第七篇 寺内伯の母國愛と自作自給觀

——財政獨立は寺内伯のお手柄——

寺内伯の朝鮮統治に於て、不肖の感激に堪へざる所のものは、寺内伯が大任を帯びて朝鮮に在りても、朝鮮の政治に淫して、母國の利害を閑却せなかつたことである、各省大臣にせよ、植民地長官にせよ、毎年豫算の切り取強盜をやり、自己の管轄する吏役の勢力圏に成るべく多くの金を抱き込まうとする有様は、宛然俄へたる犬が肉を奪ふの状態を髣髴して居る、此の点に於て寺内伯は實に泰然自若たるものであつた。

按ずるに、世界の高等民族が自己生息圏内の經濟政策を立てむとするには自作自給の根本的經濟の方針を立て、先づ食料の獨立と原料供給の獨立を得なければならぬ、此の根本政策に依りて初めて其の國の經濟政策の計劃せら

毎年豫算の切り取強盜

れ、産業方針の決定せられ、發展進取の基礎も亦此の根本より割り出されなければならぬ、寺内伯は實に此の國家の大方針を理解して朝鮮を統治されて居つたことを、不肖等は切に感謝せざるを得ない。

帝國は彈丸黒子の小乾坤にして、一寸の土耕さざるなく、一分の利漁らざるなし、故に併合時代に於て、我母國が毎年外國より輸入を仰ぎつゝありし農産物や、農産加工品のみにても、一箇年二億圓に近き巨額に上つて居つた當時の帝國は借金國であつて、寺内伯は母國の貧乏世帯より、巨額の補給を朝鮮統治の事業費に、永續的に受くることは、母國の内政にそれだけ悪影響を與へるであらうことを忍ばれなかつた、故に朝鮮の經濟的地盤を整理開拓して、先づ自作自給の方針を立て、追々其の物資を朝鮮より母國に供給し、毎年外國に流出する正貨を防止し、其の正貨を朝鮮に吸収し、それに依て朝鮮産業を振興し、購買力の増進を計り、母國財政の餘裕より來る産業の興奮を相俟て、母子國の經濟及産業は期せずして同盟同化を遂ぐるであらうと考

當時の帝國は
借金國であつた

朝鮮人の經濟
状態は月に年
に變化す

へられた。

元來併合の當時に於て、總督府は恒産乏しき各道に對し、帝國の貧乏世帯より一千七百萬圓の國帑を支出し、以て民力休養の資に充てしめ、授産事業の素地及教育事業の基礎を設定し、當局は銳意地方の開発、殖産興業に努力し、寺内伯は其の政策の遂行に督勵せられたる結果、富源は徐々々開拓せられ、朝鮮人の經濟状態は月に年に變化し、其の産業貿易の勃興は實に其の好調を立證して餘りある、試みに外國貿易に其の一例を求むれば、併合の翌年即ち明治四十四年の貿易總額は七千萬圓に上り、前年より超過すること一千三百萬圓であつた。

由來殖民地經營に經驗淺き我帝國が、大陸發展の第一歩を以て、少なくとも世人に經濟的に成功せむとする統計を示すことを得たるは、寺内伯の偉大なる精力と其の經綸の宜しきを得たるに因ることは勿論である、然れども朝鮮統治の爲め長く其の補給を母國に要求することは、母國も困まらうし、朝鮮

さしても甚だしき不幸であつて、朝鮮は自己の財源を涵養して、自ら支辨し得るの域に達せなければならぬ、即ち朝鮮は自作自給自營の途を確立して、寧ろ母國に向て財政經濟上貢獻する位いの意氣がなくてはならぬ云ふのが寺内伯の熱烈なる意見であつた。

願ふに母國財政の調節には、歴代政府當局の苦心せし所にして、租稅過重民力休養の聲は所在に起り、地方農民の疲弊は容易に恢復の狀況を見るこゝが出来なかつた、此くの如くなりしに拘はらず、政府は國力發展に促がされて、朝鮮滿洲に對し、相當なる保護、巨額の經營費を投與した、即ち朝鮮に於ては統監府設置以來、武斷政治の終末期までに、約二億圓の國帑を投與した、當時我帝國の財政に於て、二億の投資は決して迂濶に看過すべきでない。

抑も朝鮮の統治費は、朝鮮より生ずる收入及公債金と、母國の補給金より成り立て居る、朝鮮より生ずる收入は、當時は四千萬圓内外にして、租稅、

租稅過重民力
休養の聲

總督府特別會
計設置の趣旨

官有財産收入は、其の八割を占めて居つた、而して當局は治道港灣鐵道等の運輸機關改善施設に應ずる爲め、其の經費、毎年度平均一千二百萬圓内外を豫算し、公債支辨事業と爲した、斯かる臨時的支出は、能く一般歳入を以て支辨するこゝ能はざる朝鮮の既往及現狀に於て、蓋し己むを得ざる次第であらう。

元來總督府特別會計設置の趣旨は、寺内伯が其の財政をして漸次獨立の域に達せしめむとしたるに因るものにして、伯は銳意熱誠朝鮮の開発に必要な諸般の施設を爲し、一般民衆の福利増進に努められたる結果、其の施設は着々實績を擧ぐるに至り、交通機關の發展に伴ふ需用供給の調節は物價の均衡を賣らし、産業の助長獎勵は各種生産物の增收を促がし、一般經濟事情は全く其の面目を一新したるを以て、寺内伯は遂に財政の根本計劃を立て、斷乎として其の獨立の實を擧げむこゝに決心された。

該計劃の骨子は、一般經濟力の増進に伴ひ、其の負擔力を精査考量して、

公債政策に多
少の動搖は免
かれまい

地稅の増徴、市街地稅の賦課及一二消費稅を新たに施行するに同時に、會計補充金は毎年一百萬圓乃至二百萬圓づゝを遞減し、遂に大正八年度を以て打切こころなり、大正九年度よりは全然財政の獨立を見るの計劃であつた、朝鮮の財政愈々獨立し、經濟上の障壁撤去せらるゝに至らむか、朝鮮の經濟組織に著しき變動を來すは自明の理なり、此の時に至りて朝鮮の公債金は總て生産資金に投下せられたるものなりと雖も、資金の需用流動頻繁、敏速を加へ來るの結果として、公債政策に多少の動搖は免かれまい、不肖は獨立當時を豫想するに、轉た寒心に堪へざるものがあつた。

思ふに財政獨立して新事業續々勃興するの機運到來せむか、我財政當局の手腕は決して凡庸では駄目だと思へて居つた、從來の改善施設は僅かに創業の第一歩に過ぎずして、財政獨立後は一層積極的に新事業は企圖せられなければなるまい、富源の開發國富の増進に努力せなければなるまい、然れども財力には制限あり、取捨選擇を忽諸にせば、辛ふじて築き來りし地盤が強潮

寺内伯の政治
家たる手腕の
試金石

暴波に崩壊せられて、一大打撃を受くることなしは謂はれない。

按ずるに、朝鮮の經濟的地盤より獲る収入は、公債金は直接母國の財政に悪影響を波及せるも、一般會計補充金に至りては、純然たる母國の負擔金にして、併合當時は年額一千二百三十五萬圓、大正二年度には一千萬圓、大正三年には九百萬圓、大正四年には八百萬圓、大正五年には七百萬圓と毎年遞減したが、此の補充金は朝鮮統治の不足費として、母國より供給を仰ぎたるものにして、此の補給により總督府は一箇年行政費の四分の一より七分の一の恩澤に浴して居つた譯であつた。

然るに獨立後は自作自給によりて之を經理せなければならぬことを考ゆるに、不肖等は寺内伯の政治家たる手腕の試金石とし、興味を以て之を觀望してゐたが、寺内伯の財政獨立案は、長谷川總督之を繼承して立派に完成されたが、後年寺内伯去り、西歐大戰亂の終結に近づきし頃より、時勢の變遷は急激にして、朝鮮の統治經營に於て今昔を同ふせず、寺内伯の武斷政治は

長谷川二世總督之を踰、襲せしが、朝鮮騒擾勃發するに及び、長谷川伯辭表を捧呈し、齋藤總督が一視同仁の文化政治を標榜して來任せらるゝに及び、益々朝鮮文化の發展を圖り、益々朝鮮の治安を確保し、朝鮮をして速かに時代の進運に随伴せしめむが爲め、齋藤子は其の主力を文化的施設の擴充に注ぎ幾多の新計劃を立て、一々之を遂行せざる可からざるに至り、大正八年度を以て帝國の一般會計より補充金を辭し、己に獨立したる朝鮮財政を根本より覆へして、再び一般會計より補充金を仰ぐの己むを得ざるに至つた、不肖は寺内伯の財政策に賛同する。

之を要するに自作自給は經濟學の純理だ、寺内伯は一氣に朝鮮の社會を整理し産業を開發するこゝを爲し能はぬ人ではない、寺内伯の威勢を以てし、補充金ミ公債金を豊富に準備して、經綸を行はれたならば、産業の開發、農村の金融機關や鐵道網の如き、手に唾して達成されたこゝは、鏡に懸けて見るが如しだ、然れども寺内伯は前にも述べた通り、母國の貧乏世帯より、絶

自作自給は經濟學の純理だ

墮落せし民族
心と荒廢其の
會極に達せし社

へず巨額の金を朝鮮に取り出すこゝは、母國內政の不自由を懸念されたからであるミ、朝鮮社會の整理ミ産業の開發は、大動脈さへ保養して置けば、あこゝは自然増收ミ民間資本の力即ち民衆的經濟力に依て、逐年開發せらるゝであらうこゝを信ぜられたからである、不肖は此の意味に於て、當時伯が母國愛の猛烈なる思想に敬意を表し、筆を極めて伯の自作自給論を謳歌した。

朝鮮の經綸は、一氣には行はれない、内鮮人の同化も一氣には行はれない墮落せし民族心ミ、荒廢其の極に達せし社會は、其の由來する所の原因を正して、然る後着々之を矯正し、整理せなければならぬ、例へば洪水の氾濫する部分に築堤して、其の人畜の被害を防がむとするも、其の氾濫する所以を研究調査して、而して後之が築堤に着手せなければ、其の築堤は再び破壊せられて、無益の資金を抛棄するのミ同様だ、必らずや治山の結果に俟たなければならぬ。

總べて朝鮮の事は、且たに一弊を除き、夕べに一害を去つて、其處に向上

發芽の根柢を植へ付けねばならぬ、寺内伯は一徹短慮の如くにして、決して然らず、急速を要し、急速に整理の完成さるべきものは、斷乎として疾風迅雷の如くに整理されたが、例へば治水の如き事業に對しては、治山の後ならざる可からざるを觀取し、先づ全道の山を青くすることに逐年經費を投じ、治水は單に調査に止めて徐ろに後圖を策せられた、此くて寺内伯が自作自給の根柢を築き、財政獨立を計劃實行されたことは、實に母國愛の表徴にして遠大なる經國策の發端であつた。

當時、人或は財政獨立の尙早を叫びて、或は專賣事業の不可を論じ、地稅市街地稅増徴の不可を激論したが、不肖は世界各國の地稅と朝鮮の地稅とを比較して、増稅不可ならず、地價の騰貴に伴ふ市街地稅の増徴は當然にして些やかなる新稅に狂論する勿れと痛論して、極力寺内伯の實行に氣勢を添へた。

寺内伯の實行に氣勢を添へた

第八篇 武斷政治の軍事經濟觀

——余は寺内伯に滿腔の同情あり——

帝國は何故に朝鮮を併合せしかは、不肖は本書の劈頭に之を説けり、更に一步を進めて之を論ずれば、云ふまでもなく、帝國の軍備上重要なる地點にして、我帝國の國防上朝鮮を併合せなければ、帝國百年の長計を立つる能はざるが爲めであつた、併合前後に於ける寺内伯も、山縣公も、桂公も、山本伯も、將た西園寺公も、其の他我朝野の輿論は悉く然りであつた、而して朝鮮統治の政治政策は或る時期までは、武斷政治を布かなければ、朝鮮の治安は保たれないと云ふのであつた、蓋し達觀だ。

彼の大隈侯のやうな放膽縱横の政治家でも、朝鮮民族を統治するには適當に壓力を加へねばならぬ、増長さしては朝鮮は治まるものでないを論じて居

武斷政治は寺内伯の專斷ではない

られた、寺内伯は實に此の輿論の先驅として、武斷政治を行ふたのである、即ち朝鮮人を適當に抑へて置いて、我軍備上國防上、重要な施設整理を爲せよ云ふのが輿論の趣旨であつた。

故に寺内伯の朝鮮統治は、軍事的整理に重きを置き、産業の開発、經濟的利益は第二位であつた、即ち産業の開発は度外視してはよくないが、國防上の重要施設を先にする必要がある云ふのであつた、それは何故であつたか云へば、日露戦後露國は必らず復讐戦を開始する云ふことが、我朝野の議論であつたからである、故に帝國政府は二十五箇師團を作るこゝし、二箇師團を朝鮮に設置するこゝし、なつたのであつた。

寺内伯の武斷政治は、實に國防軍備を第一位として布かれた、我朝鮮の縦貫鐵道は、釜山を起點として直ちに滿洲に及び、朝鮮内の道路交通は一二三等道路に區分せられ、一二等道路は直ちに行軍に便なるべく設備された、龍山に第十九師團を置き聯隊を置き、羅南には第二十師團を設置し、聯隊を置

國防上の重要施設を先にするの必要

陸軍擴張論は露國を想定敵國とするに基

き、大邱にも平壤にも聯隊を置き、一旦緩急有れば直ちに海を渡りて南滿鴨綠の險を扼すべく、鎮海にも亦要塞を設備された、此くの如く我帝國は露國の復讐を氣遣ひ、朝鮮統治は我國防設置經營に重きを置かれた、大正二年十月不肖は朝鮮統治に關し、時の衆議院議員にして、我文壇の先聲竹越與三郎氏に意見を叩けば、氏は具さに答へて曰く、

「由來陸軍擴張論は、露國を想定敵國とすに基因せるものなるが、今は今にして無意義なるの感ならずせず、彼の歐洲の中央に於て、獨逸は連りに兵備を嚴にして、絶へず獨の佛に對する復讐戦を口にすも、かつて兵火の交へられたるこゝしなし、即ち軍備は戦はんが爲めに備ふるに非ずして、戦はざらんが爲めに設備せらるべきのみ。

今世界有数の軍學者たる露國のボルコンスキー公爵の日露開戦觀を聞くに、露西亞は第一遭退戦に於て九萬の兵を送り、日本は七萬の兵を動かすこゝしを得べし、然しながら露國は哈爾濱に二萬の守備兵を、浦墻に一萬の

守備隊を要す、されば戦線に立つ時は露國の兵力は却て日本の兵力よりも約一萬の兵員不足を告ぐるに至るべし、我陸軍當局者は只九萬三七萬の差のみを念頭に置いて、徒らに杞人の憂を抱くも、我にあつては朝鮮半島は素より南滿東蒙の地理的關係より、我軍は全部を戦線に送るを得べし、故に假りに日露の接戦するの日ありするも、理論上第一遭遇戦に於て勝利を得んこと穿ち過ぎたる想像に非ず、第一戦に於て勝利を得ば、殆んき敵に致命傷を與へたるも同様にして、盛衰の勢は既に定まり、勝敗の數亦ト知するに難からず、此の重要なる第一遭遇戦に於て、我は既に一萬の優勢を示せり。

次に最も重大なる案件は、接戦の地勢也、假りに不幸にして露西亞に再び兵火を交へざる可からざるに至れば、其の接戦地はいづれを擇むべき乎戦場を滿洲の南にす乎、將た北にす乎、此の戦場の選擇は我れの權利にして、隨意に之を擇むを得べし、何にせよ戦端を開く場合、我日本は

第一遭遇戦に於て勝利を得んこと穿ち過ぎたる想像に非ず

今日の軍備に於て足らざるを憂へず

我國を守備するを以て目的とし、決して進んで攻勢を取るが如きことあるべからず、されば我は此の權利を如何に主張するか云ふに、唯一の策は敵を南方に受くる事であり、既に朝鮮半島は我領有にして、半島領有の第一義たる兵備國防の要點も亦實にか、つて此の一點にあり、敵軍を南方に誘ふて以て戦はば、今日の軍備にして決して足らざるを憂へず、若し假りに一步を譲りて滿洲の北方に戦場を擇ばんか、其の守勢の地に非ざるのみならず、我れの不利は彼れの利となり、優劣忽ち所を異にすべく、斯くては譬へ二箇師團を増設したりして不足也、否軍事當局者の理想の如く、二十五箇師團を完全に得たりして尙不足也、軍事當局者豈此の不利にして不合理なる地點を擇ぶの愚に出でんや、現に北方には占據すべき地點なし、占據すべき地點なきに幾百萬の兵員を送るも、畢竟徒勞に過ぎず、露西亞と戦はんには如何にしても、我國は守勢を取る可からず、假令攻勢を取るも進むべき地點なし。

我朝鮮半島の如き、若し之を經濟的見地より論ぜば、年々巨額の國帑を糜して、而も其の植民し得たるもの僅かに二十萬内外に止まる、其の今日あらしめんが爲には、遠くは中古時代より、近くは明治初年より幾多志士仁人の腦漿を傾倒し、若くは時に血税をも拂つて、辛ふじて、其の成果を見たるもの、何ぞ其の失ふところ大にして、得るところの少なきや、且つ其の富源開拓の如きも、未だ萬事草創の時に際し、多くは調査規畫の時代を脱せず、頃來京元線の一部、湖南線の一地方に鐵道の開通を見るに至れり。雖も、大體より之を見れば朝鮮の鐵道は軍用鐵道にして、商戰の交通機關に非ず、殊に朝鮮の富源を稱するものは多くは、瘦田瘠土只其の名のみにして、多く實を見るべからざるに於てをや、即ち知る朝鮮は經濟的見地よりして零敗也、只軍事上にあつてのみ稍其の地利的關係の利すべきを見るのみ

要之半島は只軍事上重要な地點たるに共に、此の軍事上國防上の意義を

朝鮮は經濟的見地よりして零敗なり

寺内伯の朝鮮統治破竹の如

最も重要に用ゆるを以て、策の得たるものなりと確信す。之れ實に二十年前の當時東京に於ける、我識者階級の代表的議論にして、寺内伯は實に東京に於ける、我朝野の輿論に自負して、宛かも嶋を負ふ猛虎の如く、獅子の月明に嘯くが如く、其の輿論を自らの信する所によりて、武斷政治を縦横に行はれた、伯の朝鮮統治破竹の如し。

廢れたる國を興し、紊れたる社會を整へ、併合に不平の民族が懷中に匕首を藏するの時代、寺内伯が三尺の劍を揮つて號令する所、宛かも秦の始皇が帝王の指揮刀を揮ひ、六國を壓迫して其の富強を致したるが如く、寺内伯の號令は半島の山野に震動し、軍事施設をなし、而して其の一面に於ては地方行政を統一し、財政を整理し、司法制度を確立し、警務機關を整頓し、交通通信を擴張し、農業を改良し、盛んに朝鮮に棉花栽培を奨励し、森林令を發布して彼の秃兀たる山を治め、河川を調査して彼の荒廢せる水を治めむし官有財産を整理して驛屯土の小作制度を確立し、葦業製塩煙草等の官營事業

を確立し、衛生行政を盛んにして、醫療機關を設備し、盛んに經綸を行はれた。

東京の輿論は朝鮮が瘦田荒野の觀ありて、我經濟的原料地とするには、餘りに其の經濟的地盤は貧弱なりと考へて居つた、寺内伯も始政當時に於ては左様に考へ居られたことであらう、然るに伯は軍事施設と相俟て、産業上の調査に手を染めらるるや、朝鮮が案外の富源なるに驚き、此の分なれば朝鮮は優に我經濟的原料地とするに足ることを觀破せられ、始政翌年より着實遠大の計を以て、其の開發整理に着手された。

斯くて寺内伯は、四五年ならずして朝鮮の産業開發と社會整理に大斧鉞を揮ひ、始政五年共進會を景福宮内に開催し、各道の生産物品は競ふて出品せられ、開會當日は内地より政治家、實業家、操觚者の多數が各府縣より招待せられ、支那よりは段祺瑞氏の如きも招かれて觀覽し、何人も産業の開發整理が豫想外なりしに驚嘆した、共進會に就ては不肖は更に之を別項に述ぶる

寺内伯は軍事施設と相俟て産業上の調査に手を染む

帝國の朝鮮統治に於て第一期の成功を勝ち得た

であらう。

茲に來りて寺内伯が總督としての面目は一變せり、秦の始皇が萬里の長城を築きて軍備を固め、内政に於ては法治主義と産業開發に成功したるが如く寺内伯の總督政治は國防軍備と、法治主義と産業開發の上に、先以て帝國の朝鮮統治に於て、第一期の成功を勝ち得た、然れども寺内伯が非立憲なる名に於て、在鮮日本人の總攻撃を受けたるは、日本人が三十年來土着的基礎の上に築かれたる自治制を一令の下に撤廢せしむ、言論文章を極端に壓迫せしむるに依り、然れども朝鮮統治大局の上に於て、日本人のみの自治制を撤廢して劃一政治とし、言論自由を楯に無責任なる議論を試みるものを壓迫せしむるは、蓋し當時の境遇の己むを得ざるものありしは、識者は夙に之を諒して、齋藤の時代に於ても、日本人のみの自治制を存續せらるゝの理由なく、言論文章の如きも依然として不自由を餘儀なくせることに於て、寺内伯の武斷と、

齋藤子の團曲が輿論の正反對に赴く所以であつた、不肖は寺内伯に滿腔の同情有り。

凡そ朝鮮統治の任に膺る總督の苦心する所のものは、朝鮮は土着朝鮮人こそ新住日本人との、混合生活の状態にあることに於て、臨機應變の政術と政策が行はねばならぬ、民情風俗と民度を異にせる兩民族を一束する政治だ、半世紀も先に歩むだ日本人が不平を鳴らすのも當然だが、そこは忍ばねばならぬ、而して我朝鮮統治の政策は、表看板を塗り變へた位ひのもので、武斷政治も文化政治も、要するに同一軌でないか、世人の獨り寺内伯に酷なるは不肖の斷じて與みせざる所である。

半世紀も先に
進むだ日本人
が不平を鳴ら
すのも當然

第九篇 寺内伯の偏黨處置

——少論の黨派が惨めな最後——

併合前の韓國には二大政黨があつた、老論黨と少論黨だ、韓國時代の政黨は、代議政體の上に立ちし團體でなくて、學問の系統の上に立ちし謂はゆる學問團體であつた、之は朋黨と云ひ私黨と評するこゝが適當であらうが、我現代の政黨にしても、韓國時代の朋黨と相距るこゝ五十歩百歩であるより觀れば、韓國の朋黨が政權争奪に血の雨を降らした歴史に照らし、我政友會や民政黨なきが、政權争奪に闘争する有様と同論だ、故に不肖は韓國の老少二論黨も、政黨として之を論ずるに妨げないを考ゆる。

按ずるに、韓國の二大政黨は、君主獨裁政治の下に立て、王政を補佐し、儒教主義の見地より、政治の形式を論難したるものである、孔孟老莊の學、

我現代の政黨
も韓國時代の
朋黨と相距る
こゝ五十歩百
歩

朝鮮が近世の
文明と遠かり
し所以

其の教旨は極めて深奥にして、之を咀嚼して現實に適用し、其の方途を誤まらずむば、洵に君子の國、忠孝仁義の民にして、大に國家の面目を發揚するここが出来、而も儒教の本来本元たる支那に於て先づ之を見るに、其の文化の遠きここに於て、世界の最古にあり、雖も、儒教の精神は蟬の抜け殻の如く、只其の殘骸を學んで形式の未葉を崇拜せること朝鮮も同様にして、遂に近世の文明と遠かり、列強對座の位置に居るを得ず、常に貧弱、敗の國民として、指彈輕蔑を餘儀なくされて居る。

朝鮮に於ける儒教の感化は實に此くの如く、其の忠孝仁義は朋黨相争ふ一種の辭柄として、黨禍を助長する危険なる媒介者として、何れ以外、何等朝鮮の國民性に裨益する所はなかつた、蓋し儒教は朝鮮の中古より近世に至るまで朝鮮唯一の教育たり、信仰たりしものにして、李朝に於ては特に儒教を獎勵し、之が機關としては成均館及東西南中の四學を置き、全道各處に必らず學校を置き、各面各洞亦無數の書堂が設けられて居つた、書堂は初學の門戸に

廟議之が爲め
に朝變暮改す

して、書堂より郷校に進み、尋で選ばれて成均館に入り、高等の學問を修むるの順序を爲つて居つた。

されば身荷くも兩班にあるもの、老少二論の籍にあるものは、修年經書を史傳を讀誦し、詩に耽り文を學び、以て先哲父祖の遺業を傳承せりとなす、韓末に於て東西南中の四學は、東西二班を爲りて老論少論二黨派の角逐場を爲り、老論黨の是とする所は、少論黨の非とする所となり、互に相確執して下らず、殿講儒生の如き王者の前に於て經書の文字を布衍して時勢を論じ、人物を批評し、名を規正諷諫君徳の涵養に藉りて、政敵他派を彈劾し、中傷し讒誣して、廟議之が爲に朝變暮改し、上下擧つて口に仁義道德を唱ふるも一人の行ひを見るなく、政權の爭奪にのみ關心して尙懂らず、暗殺虐殺等の亂暴なる手段に訴へて政敵を併し、自己の門地を黨派を盛大にするに努めたされば朝鮮の儒教主義は、一も朝鮮民族の思想の上に、益有ることもなく、黨を植ゆるの辭柄に過ぎなかつた。

授爵恩賜の人
物は悉く老論
黨は悉く老論

回顧すれば韓國併合の時總理大臣李完用は、老論黨の巨擘にして、當時は恰かも老論黨が政權を掌握して居つた、而して少論黨は謂はゆる在野に志を屈し、時機の到來を策劃して居つた、然るに併合に依り閣臣及其の他の士にして、授爵の恩命に浴せし老論黨は七十餘人、恩賜を辱ふするもの若干、中には授爵を辭した人もあつたが、此の授爵恩賜の數十百人の人物は悉く老論黨であつた。

之等の人々が併合に功ありしや否やは措て問はず、然かも十數人を除いては、政權の外に雌伏せし老論黨であつて、只老論黨中の執權者の縁故であり關係者たるの故を以て特別恩賜の御沙汰に預かつた者である、只法部大臣に趙重應有り、此の人は少論黨の一人であつたが、之は老論黨に投降したる者で、權勢名利を逐ふて走つた變節漢とされて居つた。

少論黨は老論黨の爲に極端に壓迫され、鬱々として市井に在りしと雖も、雲漢龍變の機を想望せざらんや、而も併合なる政治上の大變革は、遂に少論

朋黨關係調査
の疎漏

黨の活躍を見るに其の期無く、天下の事業は悉く老論に奪はれ、天下の美名は悉く老論に奪はれ、天下の勢利は悉く老論に奪はれた、少論黨の憤恨少論黨の失望、決して尋常事ではなかつた。

之れ實に寺内伯が千慮の一失にして、朝鮮の歴史に通ぜず、李朝の天下を縦断せし、二大政黨の由來を調査せず、其の影響する所を研究せざりし失策であつた、或は多少之を調査したるものせば、黨間の争勢圈を單に京城に限りしものミ誤認せしには非るか、由來數百年に亘りて蔓延せし李朝の政黨は、六臣の變、戊午の史禍、大尹小尹、東西分黨、南北兩立より、老論少論に至りて、黨派は全道の大半に分布せられ、黄海、平安、咸鏡を除いては、東南各道に散在して居つた、乃ち慶尙道は李退溪の學を宗とし、南人の領袖たる柳成龍は其の門人たりしの故を以て、一道の儒林は悉く南人にして、其の議論歸一し、他道は各黨錯居し、忠清道は宋尤菴の住みし關係より老論多く唯だ魯城附近は、尹拯の住所たりしを以て少論多く、全羅南北道は老論少

論錯居し、江原、京畿は老論多數を占めて居つた。

斯くて苟くも儒林の住する所、私黨を植へ、遊客を收め、權利を擴張して人民を侵し、陰然として一方の覇たるを喜ぶの風があつた、辛丑以來老論少論の仇怨日に深く、互に逆名を加へて相容れず、老論黨の者にして少論黨に親めば、之を失節又は投降と謂ひ、趙重應の如きは實に少論黨の失節者にして少論に歸せられず、此の仇怨の及ぶ所は其の人一人のみでなく、遊士下僕に至るまで左様であつた、即ち一たび老論黨の使用人と爲れば、更に少論家に仕へむとするも得ず、人物の賢愚高下の批判は、獨り自己の一黨一派にのみ行はれて、他黨に行はれず、老論派の人にして、少論派の排斥に逢へば却つて之を尊重し、犯罪有りとも雖も若し他派より攻撃せらるゝ、こゝあれば、其の是非曲直を論ぜず、群起して之を扶け、以て無罪の人と爲す、篤行醫徳有りとも雖も、同黨派に非ずむば、必らず其の欠点を指摘して、餘蘊を示さない。

辛丑以來老論少論の仇怨日一深し

併合後現今の黨派の状態

按ずるに、東西老少黨派の起りし當時に於ては、其の弊の及ぶ所未だ韓末の如く甚だしきには至らなかつたか、子孫相繼で祖先の論を守り、遂に三百年來半として破る可からざる状態に陥つた、其の弊の極まる所兄弟叔姪の間にして、尙老少に分れたるものあり、之等一旦黨を分てば、心腹楚越と爲り同派の者とは往來交通すれども、兄弟叔姪とは往來せず、併合後朝鮮社會複雜し、儒林を會かさむとする文化の旺盛なるに従ひ、黨勢軟弱なるを致し、黨心は大に滅却したが、文化普及せざる片田舎に於ては今日に至るも尙其の影響は残存して居る。

寺内伯は實に此の状態を知らなかつた、併合當時より得意の老論派の少數は、種々の機關に據て殘命を完ふせしも、大部分の兩班儒生は社會の表面に出るなくして零落し、朝鮮貴族に對する士林儒林の怨嗟の聲は、同類親知の間にも行はれつゝあり、而して此等は直ちに總督政治に對する有力なる不平分子であつた。

又按ずるに、朝鮮の兩班は從來社會上に一種の特權を持って居つた、即ち文官を爲り、武官を爲るの權、産業上の特權等は其の重なるものにして、之等は我が舊士族の如く、諸侯の祿に遊食せるものも異なり、朝鮮にては政府之を黙認して、彼等が平生衣食に窮せざるの待遇を爲して居つた、即ち官を買ひ、職を賣り、民の膏血を絞るを黙許されて居つた、故に李朝の兩班は袖手安座、種々の収入は決して彼等を困迫饑餓に導かず、之れ實に兩班獨得の特權であつた。

然るに併合以來、彼等唯一無二の特權は自然消滅に歸せり、故に彼等は生活に窮し、路頭に迷へり、曾ては平安監司にして、今は福徳房（土地賣買仲介人）を爲り糊口せる者もある、老論は貴族に列し、其の黨は中樞院に伴食し、少論は發展の期なくして地方に墮棲し、槽檻に老ひんとして居る、我が舊士族は廢藩置縣の當時、祿に應じ、一時に國庫の財を興へて打切り、困迫窮乏を避けしめたるも、朝鮮の兩班少論は國庫の財を喰ふべき表面的確の理

李朝の兩班が獨得の特權

不遇の黨人の逆境に同情す

由を持たなかつた。

斯くて地平線上に威嚴を保ちて特權に生まれ兩班儒生の黨人は、總督政治の開始と共に、地平線下に埋没して、彼等の膝下に五百年來屈伏したる常民に低頭し、衣食の途を講ぜざる可からざるに至つた、彼等は時世の正當なる變遷たるを了解せずして、併合を恨み、總督政治を痛罵し、子孫父の論を守りて往々其の主義を變へず、不肖は之等不遇の黨人の一大逆境に同情の念なき能はざるも、時代の變遷は己むを得ない、彼等は今朝鮮の社會地方の乾坤に於ては識者なり、彼等は地方青年の言論に於ては優に其の指導者である。寺内伯が若し此の老少二論の黨人學問を度外視するなく、適當に救濟の方法を講じてゐたならば、新政怨恨の聲は譬へ表面だけでも靜まつたであらう之は當時授爵恩賜に與かる人物の調査に當りし、朝鮮通の國分象太郎氏（人事局長後ち李王職次官）が、老論黨の巨擘李完用侯等外二三の閣僚を協賛せし結果、此の弊に陥つたのは、朝鮮統治の爲め千載の恨事だ。

後年朝鮮騷擾（大正八年三月）の節、小論黨の巨擘たりし李敏軾氏等が、騷擾に關係せしは確かに此の間の消息を窺知するこゝが出来た。

李敏軾君は元ミ宮中の主殿院卿であつた、李太王の海牙密使事件の當時には、少論黨の總代ミして李太王に密使事件の處置を奏上した人物だ、大正八年の騷擾前には、不肖ミ事を共にせしが、騷擾に關係せし以來君はちつこも姿を見せて呉れない、不肖は戀々ミして友情禁ぜず、大正十三年秋齋藤總督に獻言して、李君處身の件を乞ふた、敗鼓の皮も用ゆる所有り、總督は同情して貰つたが、今に其の行方の知れざるは残念だ。

少論黨の總代
李敏軾

第十篇 言論文章の徹底的壓迫〔一〕

—— 言論文章は半文の價値なし ——

古へ秦の始皇は儒生を穴にし、儒書を焼きまくつた、一面から云ふミ文化の破壊だか、一面から云ふミ、口耳四寸の學者等が、天下の政道に容喙し英雄政治にケチをつけるを憎んだ始皇帝の暴斷であつた。

「世の中に學者ほミ迂散なやつは無い、空論空議に始終して、人間を小ちつほけな道德の桎梏に囚へて碌でもない毀譽褒貶を後世に傳播する、故に人間ミ云ふやつが重箱の型にはめ込まれて、身動きも出来ないこゝは、却つて、人間の自由意思を伸ぶるこゝが出来ない」

ミ云ふのが始皇の儒生壓迫、言論文章束縛の理由であつた、我が寺内伯は果して始皇の如き見地に於て、言論文章を壓迫したであらうか。

英雄政治にケ
チをつけるを
憎んだ始皇帝
の暴斷

朝鮮に於ける言論文章の壓迫は、決して寺内伯の總督就任以來の出來事ではない、伊藤統監の保護政治時代に其の端を發して居る、伊藤統監は保護政治に邪黷立てする英國人ウエツセルの毎日申報を買収し（今の總督府御用紙毎日申報）鄭雲復の皇城新聞を買収し、佐々正之氏の經營せし漢城新報を買収し、菊池謙讓氏の大東新報を買収し、御用の機關として京城日報を創刊せしめ、譯文毎日申報と相俟て、統監の保護施政を翼賛せしめたのであつた。

伊藤公は、我立憲的政治家として、世界的に政治家の名を謳はれたる所の我大政治家ではないか、此の立憲的大政治家にして、斯かる非立憲的行動に出づるに云ふことは、理由なくてはならぬ、寺内總督の新聞政策は實に統監時代の伊藤公の新聞政策を其の儘襲用したのであつた。

伊藤公統監を辭して、寺内伯統監として來るや、當時朝鮮の天下騒然として、一進會長李容九の如きは、會員一百萬を代表して、日韓合邦の上奏を爲

伊藤統監新聞
を壓迫買収す

し、反對派は右往左往に奔馳して、合邦反對の輿論を喚起し、京城の政界は鼎の湧くが如くに沸騰した、而して此の間に於て我邦字新聞は勝手氣儘の言論を爲し、或は合邦是非の論を喧ふし、政治の運用外交の機密を曝露して、帝國の對韓策に妨害を及ぼす言論さへ、之等新聞に依て主張された、恰かも當時の京城は、言論文章家の巴蜀漢中であつた。

寺内伯は先づ國文新聞、大韓日報を買収し、朝鮮日日新聞を買収し、東洋日報を買収し、朝鮮日の出新聞を買収し、最後に京城新報を買収して、悉く之を廢刊し、只御用紙京城日報と譯文毎日申報とを残した、見るも無慘な言論成敗だ、權力に壓迫せられ、金力に買収せられて、操觚の天職を弊履の如くに棄て去る人達の顔は、一體何んな顔をして居るのであらう、これでは言論の權威も何もあつたものではない、詮じ詰むれば補助金を貰はんが爲に横車を引いて見たり、高く買収して貰はんが爲めに無茶苦茶に書き暮くつて居つたのだ。

見るも無慘な
言論成敗だ

新聞は社會の耳目である、社會の木鐸である、之を利用し之を悪用すること
に於て、社會に波及する利害の大なるは勿論である、回顧すれば維新後我
文化の普及尙未だ幼稚なりし當時に於て、都鄙の別なく貴賤老幼の階級を問
はず、新聞に教育せられたる民族文化の發達は實に敏捷であつた。即ち新聞
機關は我社會的教育機關として、完全に近きまでに其の使命を果して居つた
故に明治初代の我新聞は、社會の信用を受け、新聞記者は布衣にして天下の
師表となり、世人の威敬を受けたるは、我明治擇觚界の先覺善智が、維新後
の國家に民族に對する責任の重大を自覺し、新聞機關を以て國是を鼓吹し、
武士道を鼓吹し、大和魂を教養し、婦徳を養成し、民族文化の向上に偉力を
發揮し、志士仁人其の志や國家に有りたればなり。

然るに明治の晩年より、大正昭和の現代に於ては、新聞は放漫無責任、無
定見に爲り、現代我思想界が著しく混亂し、危險思想や過激思想、翻譯文化
を誘致せるもの、新聞の無責任無定見の記事に煽動誘惑せられつゝ、あること

新聞記者は布
衣にして天下
の師表

新聞の無責任
と無定見

の莫大なるは、不肖が今更ら之を論ずるまでもなく、識者は既に百も二百も
御承知の筈、例へば茲に一問題勃發せんか、新聞記者は其の報道を競ふの結
果、是非善惡の判断を與ふるに暇なく、其の問題其の事件が、帝國の内政外
交に不利益なるに否に頓着なく、活字を大にして之を報道し、労働問題の
如き、労働者が資本主に對抗して、ストライキを起し、小作問題の如き、小
作者が地主に對抗し問題を起せば、新聞は得意に爲りて煽動的記事を掲げ、
思想界が如何に混亂しやうと、社會の秩序が如何に紊亂しやうと、之が協調
救済撲滅には何等見識ある議論をも見せない、此くの如き無責任無定見を
を以て、朝鮮問題を論議し、朝鮮事件を報道す、錯誤多きは當然だ。
寺内伯は現代新聞の墮落に憤慨したる軍帥だ、統監政治より總督政治に亘
りて、新聞の無責任無定見に驚かされたる政治家だ、彼等が立憲政治の
蔭に隠れて、言論の自由を叫ぶを片腹痛く感ぜられたる總督だ、正當なる言
論の自由は認むるも、不正當なる自由は斷して總督治下には認めない云ふ

治者の經國的
道德の上に於
て罷り叶はぬ

のが寺内伯の信念だ、故に不正なる言論は之を束縛し、之を懲戒するに斷して躊躇せなかつた、政治問題、社會問題、法律問題、道德問題に於て、總督政治の政策は被治者たる多數の朝鮮人の民度に照應して動きつゝ、あるまじき而して總督は聖天子の御名代に於て、其の威嚴を信用を保持して朝鮮を統治しつゝ、あるまじき、迂散極まる言論雜報を以て、治者の威嚴を統治の信用を傷くることあらば、之を放任することには、治者が經國的道德の上に於て罷り叶はぬは道理だ、然れども苟くも治國平天下の見地に於て行はるゝ新聞記者の言論に對し、壓迫を加へ之を束縛することあらば、それは暴君政治にして非立憲の甚だしきものである。

寺内伯は果して正しき新聞の論調に對し、暴君政治に等しき非立憲の行爲を敢てしたであらうか。

新聞の正しき論調、それは世の識者が見て正しきものであらねばならぬ、己れ一人は正しきものだと思つてゐても、世の識者が皆以て正しからずさせ

朱點の件數の
多きは彼等が
精勤の表徴だ

ば、それは即ち不正の論調である、不正の論調が朝鮮統治を毒するものであるならば、言ふにや及ぶ壓迫を加ふ可しだ、斯くの如き場合之を壓迫云ふには語弊がある、即ち懲戒を加ふ可しだ、凡識の見たる正不正は勿論それは論外だ、我寺内伯は言論取締を此の標準に置きたるは論を俟たない。

然れども新聞取締の任に膺りし警務總長は、寺内伯の旨を受けて部下の一屬官に新聞雜誌の檢閲を命じた、屬官は一言一句も之を見逃さうとはせぬ朱點の件數の多きは彼等が精勤の表徴だ、動もすれば正論不正論も十把一束して之を壓迫した、己れに不利なるものは青草を束ね縮むるが如く之を取締つた、操觚界の言論も、春秋經國の文章も、哀はれ半文の價値でもない。

茲に來つて寺内伯は朝鮮操觚界には、朝鮮統治の政治政策に氷炭相容れず權力を筆力に相對抗し、武斷を筆劍の威力には、赤裸々となりて新領土の檯舞臺に、一種の戦ひを繼續した、而して御用紙以外大部の操觚者は無條件にて一致し、寺内伯の朝鮮統治に著大なる妨害を與へた、烏の雌雄は公平なる

識者に俟つに非ずむば知る由もなし。

第十一篇 言論文章の徹底的壓迫 [二]

——寺内伯怒て猛虎の如し——

寺内伯の施政後、夢の如くに姿を消した新聞機關は、前にも述べた如く、戸叶薫雄君の經營せし大韓日報、今井忠雄君の經營せし朝鮮日日新聞、新橋榮次郎君の經營せし朝鮮日の出新聞等であつたが、是等は大概三四千圓より一萬圓位いの目腐金で買収された、峯岸繁太郎君の經營せし京城新報は、値段の折合でも付かなかつたのか、之れは一番最後まで取残されて、盛んに毒氣を吐いてゐたが、社會主義記事を掲げた云ふ名義で發行禁止を受けた。發行禁止には道が全鮮の操觚界を震動せしめた、官民共に發行禁止に同情し、寺内伯の暴君振りを非難する識者は随分多かつた、併しそれば明石警

夢の如くに姿を消した新聞機關

自己の新聞を毒殺して黄金と交換した

君總長ミ峯岸ミの八百長であつた、東京邊の新聞に掲載された社會主義めいた記事を切抜いて、京城新報に掲げさせたのは峯岸であつた、峯岸は高く買収して貰はうミ最後まで残つたが、残り甲斐があつて一番多額に買収して貰つた、そして彼は其の金で代議士運動をやつて失敗した。

新聞は天下の公器だ、新聞機關は志士仁人が據て以て、社會の木鐸として經國済民の事に従ふ機關だ、峯岸は自己の抱負を伸べて我朝鮮統治を翼賛せざる可からざる新聞を自から毒殺して、之を黄金ミ交換した、彼等新聞經營者は、商品でも賣るかの如くにして、逃ぐるが如く姿を消した、新橋榮次郎の朝鮮日の出新聞の如きに、新橋が前經營者より之を買収するミき、其の資金は友人飯泉東洋や曾木重高や、高木榮ミ不肖の四人が之を調達してやつた新橋もさるもの當時浪人組一方の旗頭ミして、黄金で頭を撫でられやうミは不肖は夢にも考へぬなかつた、さりながら黄金の前には彼れも優さしきこミ處女の如くであつた。

此くて京城の操觚界は、御用紙京城日報を残して片付られた。残されたるものは釋尾東邦君の經營する朝鮮雜誌（今の朝鮮及滿洲）と、杉市郎兵衛君の經營せし新半島と云ふ雜誌のみであつた。新半島雜誌は警務總監部囑託の山地裏一君が之を引受け、朝鮮雜誌にも買収の魔手は動いたが、東邦君は俗物でない、官憲が黄金の臭みと權力を弄むで、天下の公器を買収するとは何事かと啖呵を切つた、地方新聞にも買収の手は伸びたであらうが、應ずる者は無かつた。

寺内伯の新聞政策に懐らぬ全鮮の操觚界は、彼方此方に咆哮し始めた、中就釋尾朝鮮雜誌社長の如きは、此の非立憲的壓迫に對し、鋭利なる筆劍を磨いて、寺内伯に息をもつかせまいとの憤を以て盛んに攻撃を開始した、颯風砂を捲き勢ひ破竹の如く、見るも凄まじき光景であつた、寺内伯怒るこゝに猛虎の如く、汝猪口才也と瀕々明石將軍に命じて其の發行停止を命じ、發賣禁止を命じ、而して最後には發行禁止をも辭せざる警務總長の態度に釋尾君も

黄金の臭みと
權力を以て天
下の公器を買
収するとは何
事か

京城には御用
新聞と二種
の週刊一新聞
のみであつた

聊か辟易せざるを得なかつた。

寺内伯は新聞雜誌の取締を益々嚴重にすべく明石警務總長に命じた、而して之より先き新聞雜誌の發行は、認可制度にした、人有り新聞雜誌を發行しやうと出願しても、絶対に認可はせない、朝鮮統治を最も忌憚なく論じて、朝鮮に多數の讀者を持つ大阪朝日や、大阪毎日なきは、瀕々釜山の關門で差押へられて、朝鮮に配付するこゝを許されない、京城には京城日報と諺文毎日申報と、朝鮮雜誌と、大正二年に認可された牧山耕藏君の朝鮮公論と、川畑源太郎君の發行せし週間朝鮮實業新聞が在つたのみである。

大正三年五月、不肖は川畑源太郎君の發行せし實業新聞を買収した、實業新聞は實業に關する記事と、民團、商業會議所に關する記事と、家庭記事の外は掲載してはならぬと云ふ條件付きの新聞であつた、不肖は其の制限せられたる記載事項を撤廃して貰つて、相當地盤を固めた上は、日刊新聞として經國濟民の上に貢獻し、總督府なきに小ちつほけな御用を承はるのでなくて

大日本主義の上に立て、帝國の御用を勤むるべく考へて居つた、從來粒の悪い新聞の後を承け、春秋の筆法を以て朝鮮の改造に邁進し、自然總督政治を補佐すべき意氣を以て、警務總長や高等課長に記載事項の変更を懇談したが頑として許されない。

苟くも新聞紙條例に準據して、正規の保證金を納めて發行されて居る新聞たる以上、記載事項の変更なきは問題ではなからうと考へてゐるに、政治を報道することも出来なければ、之を評論することも出来ないことあつては、何故に之を認可したのであらう、不肖は快々として樂まず、手を代へ品を代へて請願し、理屈で往かねば道理を語り、果ては哀訴嘆願を試みても、當局は鞭に釘であつたが、結局實業新聞を京城新聞と改題する事だけは許された。大正四年九月、寺内伯は數百萬圓の經費を擁じて、施政五年朝鮮共進會を景福宮内に開催した、共進會には内地の政家も實業家も新聞記者も隊を成して觀覽に來り、北京よりは執政段祺瑞なども出懸けて來た、不肖は一日寺内

政治を報道するにも出来な
ることも出来な
ければ之を
評論すること
も出来な

伯を倭城台の官邸に訪問し。

「先づ以て共進會の御盛況を祝します、就きましては内地の各新聞社より一百人の記者團來鮮を機とし、不肖は政治經濟の各部に亘り、帝國の朝鮮經綸の爲め、大に論辯吹聴して見たいと思ひますが、例の記載事項制限の爲め、此の好機會に手も足も出でざる有様、尙卒御寛大の御取計こそ願はしう存じます」

と云へば寺内伯は。

「ウム共進會は成功見へた、君の新聞はまだ記載事項は制限されて居るかそれは氣の毒ぢや、よし近々立花に話して置く、今共進會を控へて直ぐと云ふ譯にもゆくまい、共進會の記事に付ては臨機應變でやるさ」

と伯は御機嫌頗る麗はしく、それから各道出品中の各部門に亘りて、内地新聞記者團實業家なきの批評如何を質問され、不肖は聞きし所を逐一答ふるに伯は微笑しながら頷いた。

不肖は寺内總
督に會見して
記載事項の制
限撤廃を乞ふ

不肖は官邸を辭して直ちに歸宅し、寺内伯の産業開發、社會整理の驚くべき實例を共進會の出品物に依りて讀へ、朝鮮統治の成功を論じたる京城新聞を、開會中引續ぎ來觀者に配付した、それは。

「來京一百の記者團に與へて朝鮮經營を論ずる書」

「朝鮮産業の開發と武斷政治の成功」

こであつた、京城新聞は當時御用紙以上の御用を勤め、經濟論も政治論も、縱横無遠慮に掲載したが、京城新聞が記載事項の範圍を犯せるに拘はらず、不思議に發行停止も受けなければ、發賣頒布も受けなかつた。

共進會の終了と共に、不肖は立花警務總長と、山形高等課長との間を往來して、記載事項の制限撤廢を運動したが、遂に何等の効を奏せなかつた、寺内伯は記載事項の變更位いを、何故に左様に引張るであらうか、時事も政治も報道し論評し得ることになつた曉、青柳が寢返つて武斷政治の攻撃に釋尾東邦君等と連衡するやうの事はあるまいか、それを考慮の中に加へられた

經濟論も政治論も無遠慮に掲載した

寺内總督は下僚の進言を容れりません

は事實であつた、一夕不肖は總督府高等係の境警視と論談した時であつた、警視は。

「左様に易々許されない所に、寺内伯の用意周到さが見へるのではありませんか、若しうっかり許されて、釋尾君等と攻守同盟でもやられたら、目もあてられないでせう、當分は到底許しません、寺内總督は許さぬと決められたら、何事でも容易に下僚の進言を容れる人ではありません、時節を待たうではありませんか」

と、一盃機嫌で境警視は、容易に許されない本音を吐いた、而して新聞雜誌壓迫の罪の悉くを寺内伯に糊塗した、不肖は意外の此の話に驚嘆するを得ない。

「境さん不肖が釋尾君と攻守同盟をして、總督政治を攻撃するなんて、そんな事を寺内伯が考へて居られるものせば、それは寺内伯の杞憂です、不肖が若し總督政治をバラさうと思ふなら、東京の新聞に聯絡して、寺内

伯を痛めるのは朝飯前の仕事です、然し不肖には断してそんな考は無い、記載事項變更の事に就ては、誰れが總督に話をして呉れたのですか」

「それは總長が總督に持出して呉れたのですが、總督は頭を横に振つたのです。」

不肖は怪しまざるを得ない、寺内伯は前日不肖が嘆願せしき、立花に話して置くにこそ言はれた、寺内伯は決して其の場通れにい、加減な事を言はれる人ではない、總監部の屬僚共が、新聞の議論が殖へるさうなものだから、い、加減に應接つて罪を寺内伯に糊塗するのであらう。

勿論徹頭徹尾許されないものも確定してゐたら、不肖も禪を締めて別個の方法を以て、筆剣を揮ひ戦つたであらうが、寺内伯は許されぬこゝにはない云ふ感じが不肖の神経に觸れて居つたので、陰忍持久變節改論は敢てせまい然れども膠々しめて消光したのは勿論である。

寺内伯は其の加減な事をいふ人ではない

第十二篇 言論文章の徹底的壓迫 [三]

——寺内伯の靈魂朝鮮に颯蕩せん——

共進會の大成功を機會に、寺内伯は朝鮮を去らるゝ、こゝに確實になつた、去て内閣を組織せらるべき理由が頗る明瞭になつた、今度こそは置土産に記載事項の變更や日刊發行の聞届あるべきを豫想し、一夕寺内伯を官邸に訪問するに、先客ありて一時間も待たされた、先客は寺内伯の愛婿兒玉秀雄伯(時の總督府會計課長)であつた、兒玉伯は辭去に際し。

「青柳君今日は總督の機嫌がよいぞしつかりやり玉へ」

不肖は不肖が記載事項の變更で、三箇年に亘りて根氣強く寺内伯に運動して居るこゝを知つて居つたからである、應接室に通ひ恭しく一禮すれば成る程御氣嫌はしき風采であつた、不肖は會釋しながら。

不肖は寺内伯を官邸に訪問す

「閣下が朝鮮を去らるゝ云ふ風評が高くなり、東京の新聞には内閣を組織されるに傳へられて居りますが、果して然りしすれば、朝鮮の爲には遺憾なるも、國家の爲には祝着に存じます」

云へば、伯は暫らく黙して居られたが。

「ナニ内閣組織それは豫め企て、出来べきに非ず、何も繪旨に待つ所、左様の事は予は一向に考へて居らぬ」

云、固く閉ぢて口を無愛嬌に沈黙された。

「然し天下の形勢は、方今閣下に非ずんば内閣組織に不適任の人ばかりである、現今母國の政界を大觀すれば、桂公の薨後新政黨の窄縮長州の舊縮閣下を俟つに非ずんば、其挽回は困難なるべく、大正維新の政變は今や閣下總督の椅子を動かさんとして居るのであります、閣下は桂公薨後帝國陸軍の實權を掌握せられ、山縣公の後繼者として、幾多の宿將も閣下の節度を仰ぐの状態である、帝國は今や増師問題勃興して、今期議會に陸軍側の

寺内伯と不肖の間答

予の一身は陛下に捧げあれ
ば何事も大命に依り動く迄
に依り動かす

強硬に出でなば、前途の波瀾は免かれません、去れば此際陸軍側を押へて本問題の解決を爲し得る者は、閣下を措て他に人無き状態なれば、一般の輿論は閣下が圓滿に山本伯より政權の授受あるものミ觀測して居るのであります」

云へば伯は。

「觀測は諸君の勝手ぢや、予の一身は陛下に捧げあれば何事も大命に因りて動くまでぢや」

云、伯は此事に付ては多くを語るを好まず、迷惑らしき顔つきであつたので不肖は不肖の目的に向つて幕進すべく話頭を轉じた。

「今夕伺候致しましたのは實は數年來嘆願中の京城新聞の記事事項變更の件であります、何卒此際閣下の置土産としてお許しを願ひたく存じます」

云へば伯は。

「ウム新聞の件か、つい忙はしいので忘れてゐた、近々何んミかする様言

武斷政治時代 第十二篇 言論文章の徹底的壓迫

て置く、眞面目にやるかの」

と、云て例の苦笑を見せながら、椅子を離れて應接室を散歩される、寺内伯が椅子を離れて散歩されるきはもう歸れぬ云ふ表情である。

不肖も椅子を離れて起立し、辭去の表情を見せながら、何分宜しくお願申す一禮して、官邸を退出し、そして其翌日記載事項變更願を警務總監部に提出した。

待てどもなくも認可は無い、其儘にして寺内伯は去り立花將軍も前後して十九師團長を爲り、長谷川總督來り古海少將警務總長として來り、往來引繼頻繁の中に於て意外にも不肖の願書は却下された、遺恨綿々として盡きず、去て自由の母國に遊ばんか、留まつて暴民たらんか、我輩は久之らく五里霧中に彷徨つて居つた。

不正當の自由は、不肖の憎む所であるが、正當の自由は文化人の權利である、憲法治下の識者を束縛するこゝ南蠻北狄の如くなるは、日本文化の恥辱

記載事項變更願を警務總監部に提出

ではないか、明治大正の典章は、一もして吾人に正當の自由を認められざるものは無い。

不肖は遂に京城新聞を廢刊すべく決心したが、幾多の社員の直ちに方途に迷ふこゝを考へては、忍びざる所あり、今一應運動し最善の方法を盡して叶はざれば、其時こそ潔よく廢刊せん、去て内閣を組織せる寺内首相に長文の書を送呈し、怒氣を含んで陳情した。

陳情書

謹んで遙かに一書を裁す。

内閣御組織以來、時艱に直面せられ、無節操なる政治家等を御對手に、國政の御料理には、不一方御辛勞を奉拜察候、國亂れんとして賢宰を想ふの情に堪へず、爲國家破竹の御運勢祈上候。

御退鮮後久しく清範に接せず、寂寥の感不禁、長谷川總督御來任以來、閣下御經綸の跡を踏んで、苟くも違はざるが如く、民論必らずしも是ならず

寺内伯に怒氣を含んで陳情した

雖も、亦必らずしも非ならず、風物依稀にして去年に異ならず候、御休神の程願はしく候。

扱て御在任中新聞の記載事項變更に付ては、閣下の御内諾を得置候にも不拘、請願書提出候處、却下相成候に付、長谷川總督及古海警務總長に若干事情申述候處、何等閣下より御傳聲も無かりし由拜承、茫然自失致候、朝鮮に於ける新聞紙取締規則が、如何に御施政の方便に依れりとは云へ、吾等は日本帝國の文化人にして、立憲治下の一民に候、往年明治天皇は、天地維新の當初に於て、四民の平等職業の自由を允許し賜ひ、生活の革新、自由民權の伸張、一に帝意の開擴に基かざる莫し、我日本民族が喟々として帝徳を謳歌するもの、以へあり存候。

夫れ不正當の自由は、吾等の憎惡する所なりと雖も、正當の自由は文明人當然の要求にして、況んや大帝の輪音汗の如し、吾等は之を懇求するの權利と道德に涵養せられつ、生長致居候、正當の自由に生きんとする者の壓制

吾等は日本帝國の文化人にして立憲治下の民に候

吁々天長地久遺恨綿々

拘束せらるゝの苦痛は、文化人の忍ばんとして能はざる所に候。古へに曰く、東海に冤婦有れば三年大旱す、遺恨天に通じて災厄を斯土に降すに容れせし也、我明治大正の典章は、方今斯土に一冤婦有り、一恨夫有る可からず存候。

夫れ士の衿持する所のものは、不正當の自由を行はざるにあり、儒生の學に志し文に樂むものは、正當の言論を羈束せられざるにあり、此見地に座し正當なる自由の壇場に立て、操觚の業に志せる吾等にありては、其正當の自由を束縛せらるゝ、こゝの苦痛、東海の冤婦と其遺恨を異にせず、吁々天長地久遺恨綿々焉。

俗辭に、石の上にも三年と、吾等の新聞經營以來、拘束を受けし儘既に四星霜を経過し、今や天地春風に満ちて和氣藹然人意に暢達し、野外の草木尙仁風に伸びんとして、自由の思想は乾坤に奔放致居候、此時に際し獨り京城新聞吾等は、深く嚴氷に鎖されて覆育の力を伸ばす能はず、之れ聖代の偏遇

孤情の興奮する所以に候、故に己むを得ず一書を閣下に裁して、多年の哀願を重ぬ、幸に賢慮を垂れ玉はば、御清閑の折長谷川總督閣下に御認可方御傳聲の光榮に浴し度、尊嚴を冒瀆して恐懼措く所を知らず、再拜。

大正六年四月四日

京城新聞社

社長 青柳綱太郎

内閣總理大臣

伯爵寺内正毅閣下

追て其筋には本日記載事項變更願重ねて提出致置候。

寺内總理に陳情せし一書は、幸に伯の裁納する所を爲り、其歳の夏、伯は書面を以て長谷川總督に傳達せられた、八月十日古海警務總長より、電話あり、明日午前中に總監部に出頭ありたし。

不肖は、寺内伯に陳情後、數箇月を経過して、何の手答へもないので、今

尊嚴を冒瀆して
恐懼措く所を
知らず

苦味走つた顔
を應接室に見
せた古海總長

頃寺内伯より傳命ありしは思はず、記事に付て小言でも出るのかを考へ、總長の應接室に出頭した、暫らくありて古海總長は、例の苦味走つた顔を應接室に現はした。

「ヤアーミウ〜やつ付けたな、アンタの新聞の記載事項に付て、寺内伯から御書面があつて、許してやれ云ふことですよ、安心し玉へ」

この事に、不肖は夢かまばかりに驚喜した。

「それは眞實ですか、それは有難い、日刊も同時に許されるのですか」

「日刊の事は知らんよ、左様に懇張つて一度に何も彼も云ふ譯にはゆくまいぢやないか、殊に此際は政治の評論だけを除いて認可するから、前請願書を訂正せられよ」

この事に不肖は。

「寺内伯に數年來嘆願せしは、政治の評論が最大目的であるのに、其政治

評論を除いての御認可はちこ話が違ふ」
と、つき込めば古海總長は。

「マア今度はそれ文にして置いて、アトは相談せうではありませんか、其内には僕が盡力するよ」

と云てなか／＼承知をせない、寺内伯よりは制限一切を撤して許せよ云ふて來て居るこゝは想像せらるゝが、東京から頭かぶせに來たので、若干總長の氣嫌も悪るかつたらう、依て不肖も、然らば其事は後日閣下のお盡力も御同情に待つこゝもよし、請願書を訂正しませうと答へて高等課長室でそれを訂正した。

京城新聞記載事項變更願

- 一、現種類、經濟、商工業、民團諸報告、廣告
- 一、變更種類、社會百般の時事、評論（但し政治の評論を除く）

右は大正六年八月卅日より變更致度茲に請願す。

東京から頭かぶせに來たので、若干總長の氣嫌も悪るかつたらう、依て不肖も、然らば其事は後日閣下のお盡力も御同情に待つこゝもよし、請願書を訂正しませうと答へて高等課長室でそれを訂正した。

大正六年八月十日

京城黄金町三丁目三二六番地

京城新聞發行人

青柳綱太郎

京畿道警務部長

塩澤義夫殿

此くて數日を経過したる後、八月十四日付で認可書は警務部長の名を以て郵送して來た。

政治の評論は出來なくとも、新聞らしき新聞が拵へ得らるゝ、こゝに爲つたので社は蘇生の感がした。

寺内總督時代の言論壓迫、新聞雑誌の取締は徹底して居つた、如何に其の取扱の嚴重苛酷であつたかを示す爲に、京城新聞の経路も不肖の苦心を茲に掲げたのであつた。

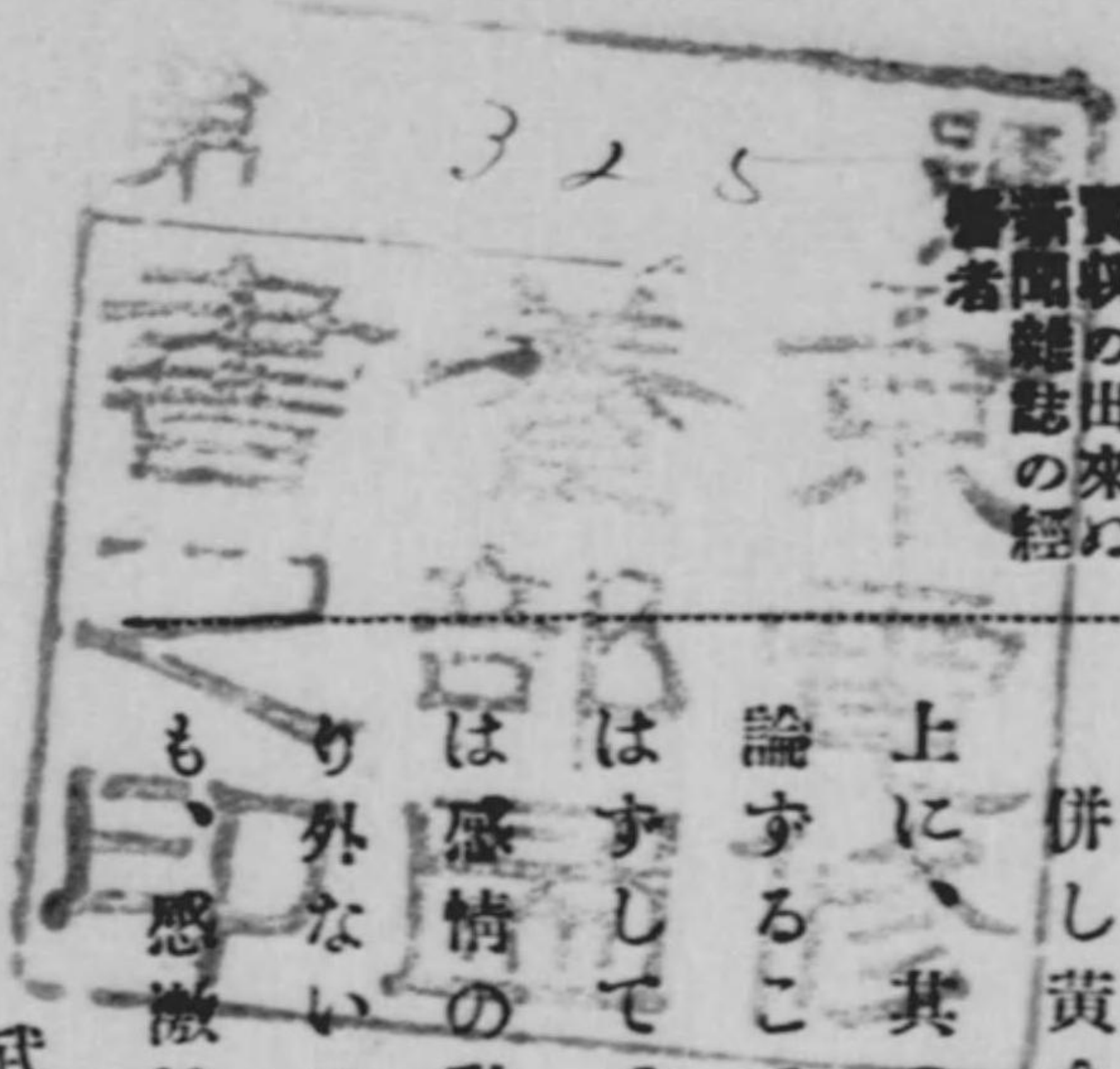
寺内伯時代の言論壓迫新聞の取締は徹底して居つた

大抵の場合、政府の施設に反対して居る

寺内伯が御用紙に非ざる新聞機關を買ひ潰した理由、溯つて伊藤統監が新聞機關を買ひ潰した理由も、朝鮮の事情に精通せる識者は直ちに之を諒解するであらう、實際現代の新聞位政治の妨害をするものは無い、京阪地方の大新聞になるミ、不偏不黨で始終政府に反対して居ないミ、新聞の賣れ行きに影響するミ云ふので、大抵の場合政府の施政に反対して居る、實に厄介千萬な言論機關ではないか、朝鮮は新附の民族が漸く舊社會の野蠻時代より蟬脱したばかりの當時に於て、活字になつて紙上に現はれたる言論報道には、嘘偽りは無いミ相場がきめられて居るミき、新聞の論調は直ちに赤にも染まり黒にも染むるミが出来た、それは寺内伯の當時ばかりでない、現今でも同様だ。

併合後の統治に於て、舊政の悪夢より覺めたる朝鮮民族は、總てが思想の過渡期に遭遇して居る、新聞記者は筆の先で右にも向かすれば左にも向かするミが出来る、躍らすミも出来れば靜まらすミも出来る、煽動雷同は

黄金の力でも買収が出来ぬ新聞雑誌の経営者



新聞記者の意の欲する儘だ、感激せしむるミも出来、泣かしむるミも出来れば、笑はすミも怒らすミも亦自由自在である、此かる社會に處せる新聞機關が、悉く經國濟民の見地に於て言論報道に従事したならば、寺内伯は多々益々新聞機關を欲したであらう、が悲しいミにはそんな慎み深い新聞機關は先づ見當らなかつた、寺内伯が之を買ひ潰して御用紙のみに縮めたのも決して無理ではなかつた。

併し黄金の力でも買収が出来ぬミ云ふ新聞や雑誌の経営者は、其の識見の上に、其の抱負の上に、其の人格の上に滔々たる新聞雑誌の経営者ミ同日に論ずるミの出来ない意氣を持て居るのである、寺内伯はそれを看破する能はずして、十把一束に繩束し壓迫し買収せむミしたのが一代の失策だ、人間は感情の動物である、日本人は感激性を帯びて居る、感激なき民族は亡ぶより外ない日本人の強いのも感激性が旺盛なからだ、文化の向上の速かなりしも、感激性の奮發だ。

人生意氣に感ずるに云ふことは、此の感激性から來て居る、寺内伯は新聞政策出發の第一歩に於て、既に日本人の感激性を無視して居られた『諸君余は不肖にして朝鮮統治の大任を帯びた、宜しく頼むよ』と出られたら、一夕談笑の間に感激性を囚へ了せられたであらうことは想像するに苦まない、寺内伯が朝鮮を去らる、まで攻撃に次ぐに追撃を放したのは、皆んな感情の衝突だ、感激性の奮發だ、結局寺内伯は新聞雑誌の操縦を誤まれた、そして折角朝鮮統治に於て成功せられたる事業までも埋れ木にして、天下多事の際に他界された。

此く武斷の政治家も、多感の操觚者は、我大陸發展の根據地たる朝鮮の舞臺に於て、壓迫と反抗の血戰的修羅場を現出したることは、寺内伯も悪いが操觚者も悪い、寺内伯逝てより、世は文化政治を爲りて、久之操觚界は沈黙したが、變を好む我操觚者や、朝鮮人の經營する諺文新聞雑誌は、操觚の天職を没却して盛んに毒つき始めた、不肖が假りに統治の権力者であるならば

寺内伯は新聞の操縦を誤られた

武斷政治家が
出て來なけれ
ば朝鮮は治ま
ぬかも知れ

大壓迫を加へて寺内伯の採りし武斷主義を發揮するであらう、無主義不道徳にして、經國濟民の抱負なく、無責任に活動する新聞ほゞ、統治の妨害を爲し我大陸發展を妨ぐるものはない、何ふせ今一度は、寺内伯の様な武斷的政治家が出て來なければ、朝鮮は治まらぬかも知れぬ、現代は實に文弱の風習々々として、全朝鮮に吹きすさんで居るではないか。

朝鮮統治今や多艱にして、朝鮮の民族心は今昔を異にし、反日本、祖國回復の思想は全朝鮮に蔓延しつ、ある、我操觚界は知て知らざる如く、或は散焉として寸前暗夜の操觚者も居り、政治家は政争黨争に没頭して、今日主義に消光して居る、嗚呼寺内伯の靈魂今ま尙朝鮮に飄蕩せん、痛ましい哉。

第十三篇 日本人の自治制廢止〔一〕

——在鮮内地人の輿論大に沸騰す——

弱きを援けて
強きを挫く任

日本人は立憲治下の國民なり、正を踏むで苟くも懼れざるは、大和民族の特色なり、弱きを援けて強きを挫く任俠は、日本武士道の精髓なり、是故に遠き古へに於ては、孤弱無援の任邦王國を助け、百濟王國の哀訴によりて、唐羅の聯合軍と戦ひ、近代に於ては日清日露の二大戦役を敢てして、數萬の人命を犠牲にし、幾億の財を糜せり、蓋し皆之れ弱國を扶けて、強きを挫く日本人の任俠と、高義に基くものなるは贅言を要せない。

然れども之を政治家の立場より云へば、日本帝國が餘力を外に籍す所以は單に弱きを援け、廢邦を興すのみが目的でない、實に王業を大陸に行ひ、王道を四海に光被せしめ、義勇奉公の念の旺盛なる大和民族を隔て、其の勢力

大帝國の大陸
運に進出する陸

圈を開拓し、經營し、萬代不易の皇基を打建て、大和民族永遠の立脚地を創設せむが爲である。

往時を回顧すれば、我在鮮日本人は、國族より一步も二歩も先に進みて荆棘を拓き、幾多韓國政變の渦中に捲き込まれ、千難萬艱能く我國是の運用に努力し、夙に居留民會或は居留民團を建設して、不羈獨立の自治制を布き、立憲治下の國民として文化に貢献し、朝鮮經營に裨補せしこも鮮少に非ず、若し我在鮮内地人の傾倒せる勇敢至誠熱烈なかりせば、大帝國の大陸に進出する陸運は、決して今日の成果を見てはるない。

然るに帝國の朝鮮統治の政治政策は、軍備國防方面に重きを置き、我廟議は寺内伯を扶掖して、兵馬專斷の政を布かしたものは當時の事情己むを得ざりしにしても、政治の形式に於て直ちに内鮮人を同標にして、劃一政治を行はむとした、内地人は先進文化の吸収に於ては、朝鮮人よきは、當時四十年も先に進むで居る、即ち内鮮人文化の度は約半世紀の隔たりがあつて、恰か

も大人と小兒との如きものである、此の大人と小兒が社會的に手を握つて歩行しやうと云ふのだから、内地人の不平も一應は理由がある。

按ずるに我在鮮日本人民は、明治三十八年公布の居留民團法によりて自治機關を設定し、併合後は更に優良なる制度を確立して、立憲自治の精神を發揮し、範を示して新附の國民を誘導扶掖し、併合の目的を達成せしめむことは、忠勇なる居留民が期せずして一般に覺悟せし所であつた、唯從來韓國ニ關係各國との間に協定せる居留地規則により、仁川、鎮南浦、群山、木浦、馬山及城津に各國居留地あり、一定の地域に限りて其の區域内に朝鮮人の居住を許さず、各國領事館及居住永代借地者代表者より成れる居留地會なるものありて、同區域内に於ける諸般の行政を執行し、且つ仁川、釜山、元山には支那居留地あり、併合と同時に直ちに之を撤廢する能はざる事由ありしを以て、總督府は我居留民團も亦便宜上當分の間其の儘に存置せしむ雖も、必ず適當の時期に於て、總督府は我民意に適合し、時勢の要求に應じたる制

忠勇なる居留民が期せずして一般に覺悟せし處

度を定め、官民協和の力を以て、朝鮮統治の有終美を濟さしむるであらうことを豫期したるに、寺内伯は我居留民の意見と希望は秋毫も顧慮して呉れない、寺内伯と居留民とは逐年意思の疏通を欠ぎつゝ、あつた。

明治四十四年春頃より、寺内伯は在鮮居留民團撤廢の意志を下傍に議し、着々其の調査に着手し、一年ならずして寺内伯の準備は己に整へり、之を漏れ聞きし我居留民は何條歎す可きや、事の實否を精査し得たる京城居留民有志は、茲に奮然として蹶起し、翌四十五年晚春の頃より、自治制擁護運動の必要を叫ぶに至り、時の京城居留民會は直ちに會議を召集して、居留民の利害に關する大問題なりとし、滿場一致を以て西園寺内閣總理大臣を始め、各大臣、貴衆兩院議長其の他要路の顯官並に政黨首領の一考を煩はす爲め、委員を擧げて陳情書を發送せり、之れが自治制擁護運動の序幕であつた、而して該陳情書は時の民會議長海津三雄君等の議員に依て起草された。

我居留民は何條歎すべきや

陳情書

「前略、民團現世の組織は明治三十八年制定の居留民團法に従ふも、其の集團の實質に至りては、遠く明治十八年日韓條約の締結以來日本人の京城居住を許され續々渡來したるも、天津條約に依り守備兵を撤去したる當時、在留日本人は殆んど政治上の保護を享受する能はざる爲め、自衛の必要に迫られ、總代事務所、居留地議會等の規約を協議設定し、自ら團體を組織し、辛ふじて生命財産の防衛を爲したる時に於て、自主自治の團體たる萌芽を發したるものなりとす、爾來日清日露の戰役を経て、來住日本人の數を加ふるに従ひ、自治機關亦漸次膨大して、明治三十九年民團法施行規則實施の當時に在て、既に人口一萬四千餘ミ、戸數四千餘を有し、十三萬餘圓の歲計財政を經理し、其の後民團の發展は歲々逐ふて愈々進み、現下人口五萬三千餘ミ戸數一萬四千餘を算し、民團公有に屬する地所六萬餘坪、建物一萬餘坪を有し、本年度財政豫算三十七萬餘圓を告ぐるに至れり。」

京城民團の發達現狀は、優に母國中等以上の都市に比して、遜色なきこと此くの如く、其の自治の歴史は國旗の保護未だ全からざる以前に溯るの素地を有するところ彼の如し、自今益々之を保護し之を助長し、以て自治團體の完成を期するは、事理の當に然るべき所なりと信ず。

然るに世説の傳ふる所に依れば、朝鮮居住の母國民に對しては、其の自治制度を廢止せんとするの議ありと、若し此説をして萬一に實現施行せしむるあらば、是れ我憲政史上に地方制度退歩の跡を印するものにして、恐らくは民心是れより畏縮して安からず、産業是れより萎靡して振はず、終に帝國臣民の大陸に於ける發展を阻止するに至らんこと。

朝鮮の開發は獨り之を鮮人の手に望むべからず、其の任務は結局之を母國民に俟たざるを得ざるの實情を有するところ、蓋し識者の疑はざる所なるべし、母國來住民をして畏縮せしめず、大に進取の氣を養ひ、自助の徳を修めて其堵に安んじ、其業を勵むを得せしむるの道を講ずるは蓋し至要の

自主自治の實
質を尊重保存
せらるゝの態
度

政策なるべし、而して下級行政の自治經營を助長し、民心をして倦まざら

しむる如きは、即ち此政策の發現たるべきを信じて疑はざるなり。

在外帝國臣民に適用すべき居留民團法は、帝國の領土に歸したる朝鮮に
住する母國民に對し、其の適用を廢止し地方制度を創定すべきこと勿論な
れども、既存の自治制度を實質的に一掃し、其の下級行政を擧げて之を官
憲の專權に委ぬるが如きことなく、自主自治の實質を尊重保存せらるゝ、制
度の創定あらんことを切望す。

曩に朝鮮總督に進言する所あり、總督亦必らず民意を斟酌して適當の處
置あるべきを信ずる雖も、尙民意の貫徹を望むの情に堪へず、敢て此陳情
を爲す、幸に一顧を煩はすを得ば誠に望外の光榮なり、冀くは照察あらん
ことを。

明治四十五年六月二十七日

此の陳情書は寺内伯が劃一政治の準備に對する反對の布告なり、委員等は下

微温的態度の
陳情書何をが
なさんや

級行政を擧げて官憲の專權に委するが如きことなきを切望す云へり、明か
に寺内伯の自治制撤廢の豫定に宣戰の布告でなからねばならぬ、此の際に處
せるの陳情としては、情意盡くさざるの嫌なきに非ずや、正に巨砲を發し寺
内伯の膽をして寒からしめざる可からざるの精細なる史眼を、銳利なる筆劍
を以て、專制政治家の胸に凝せざる可からざるに、自治制存續に對し、幸に
一顧を煩はすを得ば望外の光榮なりと陳べて居る。

武斷政治に捷ち驕れる寺内伯に對し、此かる微温的態度の陳情書何をかな
さんや、寺内伯は遂に之を握り潰した、而して着々民團自治撤廢の段取を
進めた、猛虎深山に往く所目に狐狸の躍るを許さずの概有り。

『自治』何が自治か、在鮮日本人民は帝國の大陸策の爲めに暫らく犠牲さ
なりて、内鮮人劃一政治の下に槽檻に伏せよ、同化は同治でなければなら
ぬ、同化を欲せず同治を否む日本人有らば、速かに朝鮮統治の團外に通れ
去れ、同治同化は帝國の朝鮮統治大方針であるぞ、此の寺内の政治政策も

廟議の賣らす結果であるぞ」

さには言はれないが、不肖は寺内伯の方寸を左様に村度するのである、寺内伯の專斷は廟議の代表たるは勿論であらう、伯の意氣や毅然として獅子月明に嘯くの慨を示して居つた。

寺内伯の意氣
や獅子月明に
嘯くの慨

第十四篇 日本人の自治制廢止 [二]

——猛虎深山に往く處狐狸の躍るを許さず——

京城居留民團は遂に全鮮の居留民團に機を飛ばし、事態容易ならざるを以て、全鮮居留民團の一致團結の力にて、寺内伯の決意を翻へさむとし、其の意見を問ひたるに、各地の民團は一齊に贊同の意を表した。

大正元年秋九月、京城居留民團の發議に依り、朝鮮各地の居留民團議員聯合協議會は、二十日を以て京城に開催された、京城、元山、釜山、鎮南浦、

日鮮人合同の
自治制度

馬山、仁川、木浦、平壤、大邱、群山、新義州の民團各議員は一室に集議し協議討論の結果左の陳情書は、委員の手に依りて起稿せられ、直ちに要路の人々に發送された。

陳情書

一、民團所在地域に在る内地人に對して、現行民團制以上に完全なる自治制度を存續施行す。

二、地方の状況によりては、日鮮人合同の自治制度を施行す。
今又更に此の書を閣下の左右に呈する所以のものは、民團存續の事一に在鮮母國民の直接利害に關するのみならず、鮮地開發の根本義に關係なき能はざる所、獨り總督制令の範圍に於てのみ決議せられずして、恐らくは一たび廟議に上り議會の協議を経て決定せらるべき問題なりと思考するが爲めなり。

朝鮮に於ては母國民が直接經營しつ、ある居留民團の現在數は、京城、

武斷政治時代 第十四篇 日本人の自治制廢止

仁川、釜山、大邱、馬山、木浦、群山、平壤、鎮南浦、新義州の十一にして、或は遠く幕政時代より、自治の形態を相傳し來れるのあり（著者曰く未だ幕政時代より、日本人の朝鮮に來りて民團的自治を行ひし事有るを聞かず之れ或は委員の誤解ならん）或は近く十數年來の發展に係る者あり、其起原沿革等必らずしも一様ならずも、現に居留民團として存立するもの孰れか多少の歴史を存在の理由を伴はざるなく、日韓併合の以前に溯り、帝國の威信未だ八道に行はれず、政治上の保護隨つて頼む可からざる時に當り、卒先渡來したる日本人か、自衛の必要に驅られ便宜集團したるもの實に今日に於ける居留民團の前身を成す、爾來幾何の年處を経其の間屢々時變に遭遇し、危險周圍に逼り、生死間髪を容れざる如き急迫の場合に於ても、我同胞は能く耐忍し堅持して、以て現在の地位に到達せり大なるものは人口五萬に達し、小なるもの數千を下らず、現に一個の自治機關を有し、學校、道路、勸業、衛生警備の費途一年殆んそ四十萬圓に近き者あり、悉く居留民の獨力負擔を以

て辨じ、未だ嘗て他力を仰かず、吾人素より之を以て自治體の完全なるものとは云はず、然れども之を母國の市町村と比較して、其設備能力共に其だしき遜色あるを自覺せず、要するに前記十一個の居留民團は朝鮮に於ける母國民の多數を包容して各々其所を得せしむる外に、朝鮮人に對しても何等の政務を要せずして、直接間接に其利澤に均露せしめ、期せずして日鮮人同化の政策に一致し、相共に文明都市を實現するの目的に對つて努力奮勵しつゝあるなり。

然るに道路傳ふる所に依れば、當局に於ては近き將來に於て今日の民團制度を撤廢し、下級行政は日鮮人劃一の制度の下に、總てを官憲の手に於て行はんことを意ありし、吾人在鮮母國人に取りて眞に晴天霹靂の感なくんば非らず、若し風説をして眞ならしめば、二、餘萬の在鮮母國民は民團の消滅と共に、全然既得の權利位置を失ひ、有司專制の狀態に復歸せざるべからず、斯くの如きは豈に吾人の能く忍び得る所ならんや、或は曰く

日韓併合の趣意は遍ねく鮮人をして一視同仁の治に浴せしめんことを以てするも、彼等の多数は依然として依らしむべく知らしむべからざるの民也、與ふるに自治制度を以てするが如きは前途尙歲月を要す、今彼等の眼前に於て獨り母國人に對してのみ特殊の制度を設くるが如きは、徒らに彼等の誤解を招き新附の國民を悦服せしむる所以にあらざれば、或る時機に達する迄民團制度の撤廢は政策上已むを得ざるなりと、由來制度の別は民度の同じからざるより起る、優越の民には優越の制度を要し、未開の民には未開の制度を要す、現に日鮮人の間には其能力性情習慣の違かに一致し難き懸隔あり、漫然二者を混淆して同一制度の下に立たしめんことを如きは、公平を衒ふて亂階を招くの嫌なしとせず、平等の裡に差別を立て民度に應じて制度を定む、是れ兩者をして各々其所を得せしむる所以たらんばあらず、朝鮮に於ける日本人が居留民團なる名稱の下に多年自治權を保有し來れるもの、畢竟上述の理由に駭胎し伴ふに苦慘の歴史を以てす、多年承

由來制度の別
は民度の同じ
からざるより
起る

現行民團以上
の自治制度を
要す

認されたる制度を存續施行したればとて、之が爲に鮮人の誤解を招き累を政策の上に及ぼすの虞ありとするは抑も杞人の憂に等しきのみ。

吾人は寧ろ進んで現行民團制以上の自治制度を要求す、現在の民團制度は之を母國の市町村制度に比すれば幾多の不便不備あるを免れず、吾人は現行民團制以上の自治制度を要求す、自治制度にあらざる制度は如何なる性質のものにしても又た如何なる口實ありとも斷じて吾人の甘從し能はざる所也。

吾人は平生總督府の施政に對して明りに異を立て累を當局に及ぼす如きことを慎むものなり、然れども今日の在鮮母國民は既に單純なる移民若くは出稼人の種類にあらず、至る處都市を建設し、主義精神を有する自治團體を經營せり、其位置と實力とは曩くば當局亦之を承認して、其意氣を沮喪せしめず、以て大陸發展の先驅者たらしめんことを。

今夫れ強いて民團制度を廢し自治の權能を否認せば、恐らくは官民離

の端此れより發せむ、而して新に渡來せんとする母國人をして趨趨逡巡せしむるに至らば、滿韓移民集中の國是に影響なき保せざらんこと。

以上民情を吐露し謹で清鑑を請ふ、若し一顧を煩はすを得ば誠に幸なり。

大正元年十一月

以上は京城居留民會議長海津三雄外各地の民會議長及議員十九名によつて山縣政務總監の手許に提出された、所論堂々、道がは全鮮民團議員の意見書たるに背かず、寺内伯は果して之を如何に處理せんことをや。

陳情書の歌ひし如く、我在鮮母國民は單純なる移民及出稼人の種類に非ず至る處苦楚慘憺を経て都市を建設し、主義精神を有する自治團體を經營して居る、其の位置と其の實力とは寺内伯は之を認めねばならぬ、決して鷄鳴狗盜の輩の集團ではない、有力なる大陸發展の先驅者である、若し寺内伯が強いて之を撤廢し、自治の權能を否認せば、恐らくは官民疎隔の端此れより發

道がは全鮮民團議員の意見書

議論縱横寺内伯の專政に憤慨す

し、内地人の朝鮮渡來を妨げ、帝國政府の朝鮮移民集中主義に、悪影響を及ぼすことは、鏡に懸けて見るが如しだ、寺内伯は果して之を如何に處理せんことをや、三寒四温朝鮮の天氣は豫測し與ふも、寺内伯の心中は部下の官僚も、民間人士も何人も之を豫測することは出来なかつた。

京城に於ては民間有志は各處に於て、會合頻々として行はれ、議論縱横寺内伯の專政に憤慨し、慷慨激越の口調を以て、寺内伯排斥の聲さへ勃興した然れども寺内伯は憲兵警察をして、民間の運動を激しき壓迫を加へ、儒子等何事をか爲すこと云はぬばかりの態度にて、寺内伯は白眼と譴責的態度を以て、此の問題に應酬した、氣の小さな山縣政務總監なきは、糊塗的言辭を弄して有志に接觸したるも、寺内伯は豪氣堂々些の屈托なく、其の態度の鮮明にして、朝鮮統治に對する方針と政策は、一定不動大磐石の如き意氣を示した、伯や人傑なる哉。

大正二年一月、京城居留民團議員の改選有り、民團撤廢の準備は當局は既

實行委員を選
挙して目的の
達成に努力す

武斷政治時代 第十四篇 日本人の自治制度止

に其の成案を見んば、新議員の民團存続に對する意見は、敢て舊議員と異なる所なし、否寧ろ其の主張の猛烈なるものあり、議員田中半四郎、大村友之助の二氏は、左の建議書を居留民會に提出し、民會は實行委員を選挙して目的の達成に努力した。

居留民團廢止に伴ひ新に施行せらるべき行政組織中に完全なる自治制度を制定せられんことを更に民長より其筋に陳情せんことを望む。

理由

朝鮮に於ける居留民團は、愈明年三月を限り廢止のことに内定せり。聞く、而して現行民團制度廢止後に於ける行政組織に就ては、民團發達の光輝ある歴史を尊重し、在留母國民の多年享有する自治權の存続して、益々貴重なる自治思想の養成を圖り以て、統治上の優秀なる効果を期せられんことは既に再三其筋に陳情せし所なるが故に、當局者亦必ずや、民意を諒察して、新に完全なる自治制度を布き、以て遺憾なからしむべきことを信

官僚政治に退
歩の汚點を印

す。雖も、或は又現總督が日韓併合當時に於て、兩國民の差別を撤去し新附の領民を我同胞として、同一待遇の下に相提携して處世の事に従ふべきを訓令せるに基き、且つは專管居留地撤廢に關し、外人に對する言質等より我居留民の意志を十分に貫徹せしめ難き事情ありしを以て、論者の必無を保し難き杞憂なきにあらず、若し萬一斯る顧慮の爲に、居留民に對する自治制度を全然實質的に存続せざることあらば、實に我憲政史上に特筆すべき朝鮮居留民が自治の歴史と事功を滅却して、官僚政治に退歩の汚點を印するのみならず、恐らく我が民心はより畏縮して愈産業の不振を來し、其結果の波及するところ、單に各居留民の利害休戚に關するのみにあらざるべし、既に健全なる思想を有する公民をして地方行政に干與せしむるは、國家の將來を安全ならしむる、唯一の良道なり。而して天下舉りて、自治思想の發達に腐心する今日に方り、誘導扶掖して以て新附の領民が、政治的能力を昂上せしむべき責務を有する、我が居留民の自治行政を逆轉して官

尙專權の古き制度に退却せしめ、民意代表機關の一切を遮屏する如きことありせば、之を大にしては我が國運の興廢に關し、東亞の平和と幸福とを保全すべき、特別の位置を有する我が帝國の進路を阻止し、小にしては即ち朝鮮開發に關する進取、自助の公共心を萎縮せしめ、人心頽に倦むの憂ふべき現象を招來するに至るべく、洵に容易ならざる問題と謂ふべし、是れ即ち些か重複の嫌あるに拘はらず、新行政組織の確定を見ざる事前に於て更に民意の在る所を陳べて當局に注意警告し、以て相互の幸福を圖るべき我々が居留公民の代表たる職責を盡すに於て、最善の道たるべきを信ず、是れ本建議案を提出する所以なり

大正二年九月廿五日

理路井然として實に堂々、寺内伯をして默想之を久ふせしめたりと聞く、然れども寺内伯は初一念を驕へざす、超へて僅かに一月、大正二年十月三十日制令第七號を以て、府制を公布し、居留民團、各國居留地會及漢城衛生會に

洵に容易ならざる問題と謂ふ可し

總督は寺内伯の如く強からずむことを希望す

する法令は、之を廢止することを發表すると同時に、内地人の教育のみは専ら内地人をして其の費用を負擔せしめ、之に對し必要の補助を與ふるを適當と認め、學校組合を設けて學校組合令を改正公布した。寺内伯は強い、並大抵の總督なれば、全鮮内地人の一致集團せる力を發揮して、ぶつつかつてゆけば、既に發令發布したる問題に於ても、之を取消して糊塗彌縫する、文化政治時代ならば、自治の廢止、民團の撤廢は、五年や十年は生き延びたであらうが、結局それは姑息だ、苟くも朝鮮總督たる者、其の一言其の一行は、寺内伯の如く強からむことを希望する。

第十五篇 日本人の自治制廢止 (三)

寺内伯は大方針に猛進するのみ

寺内伯は、自治制廢止民團撤廢を斷行して、遂に内鮮人劃一政治を布かん

朝鮮民族に取
りては非常の
恩恵

ます、朝鮮人に對して斯くの如き寛大なる處置は、併合の精神に照らして之を論ずれば、實に思慮ある賢明なる方法にして、朝鮮統治上最も良好の結果を持ち來すべき筈なり、寺内伯は統治上良好の結果を冀ふて、三十年來日本人が養成し來りし自治制を廢止せむとするのだ、之れ朝鮮民族に取りては、非常の恩恵であらねばならぬ。

日本人の居留民團は、大正三年三月三十一日を以て、閉鎖撤廢さる、ここに決した、總督府は二月七日、九日の兩日午前九時三十分より、總督府會議室に全鮮居留民團民長を招集し、民團事務引繼準備の打合を開催し、山縣政務總監は寺内伯の旨を以て、左の如き訓示を公示した。

府制及學校組合令の施行に關する準備の爲め、茲に居留民團代表者たる各位を會同す、本總督は深く其の勞を多す。

抑も居留民團は、元外國に於ける特殊の制度にして組織せられ、爾來年所を経て健全なる發達を遂げ、公共の利益を進め國家の隆盛に資せしこ

内外人全般に
亘る公共事務
を統一

洵に鮮少に非ず、蓋し是れ職員の精勵と市民協力の結果とに依らずんばあらず、然れども併合の成れる今日に於ては、民團は當然其存在を失はざるを得ず、且つ同一行政地域内に於て其利害を均ふるに拘はらず、内鮮人たるも外國人たるもに依り、各行政組織を異にするが如きは、統治上其宜しきを待ざるのみならず、地方共同の利益を増進する所以に非ざるを以て慎重調査を遂げ居留地制度を撤廢するも共に、今回之が改正を行ふに至れり。

新制は居留民團、各居留地會、漢城衛生會及是等團體所在地に於ける面を廢止し、新に府を設置し、是をして其區域内に於ける内外人全般に亘る公共事務を統一經營せしめ、只例外として内地人の教育に關する事務に就ては、別に學校組合を設立して之を處理せしむるこもせり、學校組合に關する新制は從來の制に比し變更を加へたる所少なし、雖も、府の組織及機能に至りては一般の地方團體に比し著しく其趣を異にするものあり、蓋

し府の行政は内鮮人及外國人を一體として執行するものなるが故に、徒に理論に泥み、遽に制度の完備を求むるが如きは、却つて朝鮮の現狀に適せずと認めたるに因る。

惟ふに、地方の發達を期せんを欲せば、時勢に適應する制度を確定するの必要あるは素より論なし、然りと雖も之が運用を圓滑ならしめんを欲せば、特に之を府民の自重心と公共心とに期待せざる可からず、多年居留民團制度に盡せざる各位は、此際篤く此意を體し新政の趣旨の徹底に努む可し。

今や新制の施行と同時に各位任務の終了將に近きに在らんを、宜しく制度改廢の間に處し至誠奉公以て有終の美を濟さん事を期す可し。

訓示の所論は朝鮮統治上實に我が意を得たるものなり、然らば不肖は當時民團撤廢の賛成論者なりしかと云ふに、決して然らず、不肖は之を時期の問題と論じた。

時勢に適應する制度確立の必要

時期の問題に於て寺内伯の民團撤廢に反對

新附の鮮民と同様にして同化の政を施さんとするは、素より我朝鮮統治の大方針なり、之れ決して不肖等の異論なき所、然れども當時既に内鮮文化の程度を異にし、民情風俗亦同じからず、故に不肖は當時前途二十年にして劃一の政治を理想したり、同治同化の施設は勿論之れに歲月を假さねばならぬ内鮮共學、内鮮人同化及産業の同化は、實に我朝鮮統治の理想である、不肖等は只時期の問題に於て、寺内伯の民團撤廢に反對せしも、朝鮮統治の理想としては、決して公けに寺内伯を攻撃するこゝは出来なかつた。

大正三年三月三十一日は、日本人居留民團の解體當日であつた、全鮮の居留民團は、悲痛の叫びを擧げて之を閉止した、京城居留民團解體の狀況は左の奉告文に依りて之を示す。

奉告文

「京城居留民團長古波管堂、齋戒沐浴して謹みて京城神社の大前に白さく
恭しく惟るに明治十八年京城居留地の公認せられてより、今日に至るまで

星霜己に三十年、其の間居留地の盛衰時に一泊一長ありたりも、常に居留民の幸福を増進するを以て、自治行政の主眼をなし一同相戒めて、内は産業の發達に盡し、外は帝國の權利伸長に力め、特に明治三十九年八月に居留民團法の實施以來、我居留地は驚くべき長足の發展を促し、産業交通教育衛生等機關漸く備はり、以て今日の隆盛を來せるは、天皇陛下の御稜威を、官憲の保護及居留民の注意淺からざりしに依るも、抑も我大神の冥助を重じて居留民を護らせ給ふに因る所にして、洵に感激に堪へず、顧みれば明治三十一年一月三日、太神を鎮祭し奉りてより幾春秋、時の祭祀を怠らずも、果して神慮に副ひ奉りたるやを思ふて恐懼措く所を知らざるなり、今爰に大正二年十一月を以て發布せられたる府制令を施行せらるゝに當り、愈々本日をして、我が居留民團は解體せられ、奉祀者亦更代して新京城府之を承繼すること、なりぬ、故に本日の吉日を卜して臨時の祭儀を擧げ、神饌を供し、幣帛を奠して、民團解體を奉告し併せて恩

大神の冥助を
重んじて居留
民を護らせ給
ふ

奉告文を桐
箱に納む

廟の萬一に軋するの至誠を捧げ奉らむとす、伏して冀くは畏くも、大神の神靈之を饗けて諸ひ給はむことを、誠惶誠恐謹みて白す。
京城居留民會は、豫てより民長の行ふ民團解體奉告祭と同時に、自治玉碎報告祭を擧行するに決し、民會は報告文の起草を、議員大村友之丞君に委嘱した。

三月三十日午前十時、最終の民會は開かれ、奉告文は桐箱の箱に納めて、民會議長高橋章之助君の卓上に置かれ、報告祭は午後一時より、京城神社の神前に行はれた。

奉告文

維れ大正三年三月三十一日京城居留民會議長高橋章之助、居留民會を代表し謹むて敢て昭かに、皇祖の神靈に告ぐ、伏して以るに我か京城に居住する豊葦原の秋津洲の臣民が南山の麓、倭城臺の地を清めて、天津嶺を樹て常世の浪の重浪歸する神風の伊勢の國より分靈を移御し奉り、此に鎮座り

まして居留地の守護神たらせ給ふこも十有五年五ヶ月を経ぬ、此間我居留地の情態は年毎に健全なる發達を遂げ、今日の盛運を現出するに至れり、顧みて其進展の經過を追想すれば、幾多國體消長の波瀾曲折を経て、能く國是の運用に終始し、市況の般賑を圖り來れるもの、天佑に依るこも甚だ多し、仰けば彌高く崇むれば彌靈あり、昨秋特に神殿を修築し、大祭を舉行して、愈々且尊拜恭の誠を致せる所以のもの、偏へに恩徳の萬一に答へ奉り、益々神人靈氣の享通に因りて、福利の増進を希へるに外ならず、然るに日鮮人を同一施政の下に置かんとする統治上の犠牲を以て、愈々本日を以て我自治制度を撤廢せられ、居留民團の解體を共に、我京城神社は新京城府の所管に移るの止むを得ざるに至れり、我等神明の加護に依りて國運の隆興に些か至誠を披瀝せるもの豈感慨に禁ゆべけんや、思ふに我民團の自治は三十餘年の昔より、剛健なる同胞が無数の凌辱を憐れに堪へ、萬難を排して之れを培養せるものにして、實に心血の結晶なり、鑿きに其撤廢

福利の増進を
希へるに外な
らず

赤手荆棘を披
きて祖先の雄
志を繼承

を見んごするや、臣等は熱烈なる誠意を以て其維持に努めたるに拘らず終に其目的を達する能はず、去一月十九日の居留民會は、滿場一致の決議を以て千秋の恨事とする意思を表明せるこもは、神明の夙に鑑照あらせ給ふ所なるべし、蓋し自治の精神は立國の眞髓にして、其能力の有無は直ちに社稷の盛衰に關す、天は唯自ら助くるの人民を祐くるあるのみ、雨露の澤日月の恵ありも雖も、生氣なき草木は繁茂せざるなり、赤手荆棘を披きて祖先の雄志を繼承し、抵る處に幸福なる帝國を擴張し得る精魂を氣力を有する人民をして、空しく其機能を停止せしむるは猶寶玉を汚濁に委棄するに等しかるべし、臣等は新領土に居住し重大なる特種の任務を帶有するが故に、遵法の美德を尊重すも、必ず神徳の冥助に依りて、天地の正理に順應すべき臣等の所志の達成するべきを信じて疑はざるなり、茲に社殿を新京城府の所管に奉移するに方り、恭しく禮祀し、群望を秩で、伏して微衷を表し奉る、稽首謹言。

之れ實に沈痛悲壯、立憲國民の思想の半島に停頓し、大和民族の霸氣の大陸の一角に縮まるの狀、髣髴として目に見る如し、嗚呼我民族の守護神、果して如何の心を以て此の祭を享くるや、神は王道を以て寺内伯に與みするか、神は覇道を以て進取の日本人に與みするか、不肖は寧ろ寺内伯を悲壯とし、伯の孤情に同情の念なき能はず。

寺内伯は此くの如くにして、筆の人口の人により、前途幾年間攻撃を繼續されたが、豪懷不屈の寺内伯は、空嘯て曰く、諸君乞ふ十年の後を正視せよ、其の膽、斗の如き英雄は、嘲るが如く冷笑するが如く、一劍の任に杖て大方針に猛進するのみであつた、而して不肖は私かに寺内伯の硬直なるに感激するのみであつた、強き政治家でなければ、朝鮮人治は駄目であらう、否寺内伯の如く強き一點張でもいかん、寛嚴宜しきを得るのが、朝鮮統治の秘訣だ、後ちの總督忘る、勿れ。

諸君乞ふ十年
の後を正視せよ

第十六篇 電光石火的土地制度の確立

寺内伯が經國濟民の大記念

按ずるに、寺内伯の武斷政治が、經國濟民の上に大なる成功を齎らせるもの、一にして足らずに雖も、世の操觚者も、政治家も、學者も、見て見ざるが如く、知て知らざるが如く、其の功績を埋没し去らんとするは何ぞや、何をか經國濟民の上に大なる功績を遺せりと言ふ乎、朝鮮土地制度の確立は即ちそれである。

不肖韓史東史綱目を按ずるに。

「箕子は殷の田制を用ひ民に教ゆるに田蠶織作を以てす井田の遺址は今の平壤南門内に在り」云、又東國通鑑を按ずるに。

「箕子王險に都し其民に教ゆるに禮儀田蠶織作を以てし人民の爲めに禁八

經國濟民の上
に大なる紀念

條を設け其田野都邑を辟き飲食は邊豆を以てし仁賢の化有り其後周の衰へて燕の王を稱するを見兵を興して燕を伐たんを欲す、尊周大夫禮の諫言に依り、遂に禮をして燕に到り王を説かしむ、燕も亦敢て攻めず、後ち子孫稍驕虚也、燕即ち其將を遣はして之を攻め、地二千餘里を取り、滿汗に至りて界を爲し、朝鮮爾來遂に弱し

と、不肖曰く箕子の平壤舊都論は、現代の學者に依りて否認せられたり、箕子の舊都が今の南滿遼東の地なるは、明瞭なりたり、平壤に箕子井田の形制を存せるは、韓の經世家が夙に箕子井田の法を模倣して、平壤に其の井田法を策論したのであらう。

箕子の井田法が經國濟民の上に貢獻したる分量は今ほ措て之を論ぜず、箕子亡びて衛滿の朝鮮を爲り、三韓の鼎立を爲り、新羅の一統を爲り、朝鮮の田制は新羅一統後文化の急進的發展によりて改革せられ、即ち三韓鼎立の當時朝鮮の土地は、生民共有の觀を呈したりしもの、新羅の末年には公田の制

箕子の舊都は
今の南滿遼東
の地

純然たる土地
國有の制

度を爲り、職田、賜田、口分田、祿田等の制を見るに至れり、即ち此の時代には宛然土地國有の制度を出現せしが、新羅の國勢衰へ、新羅民族的道德の墮落より弊制百出、官吏は苛斂誅求を恣まにし、王族は廣漠たる田土を私有し、文官武官は其の階級に依りて賜給せらる、田土以外、邊陲の良田を横奪して其の收穫を私し、人民は丁田を支給せられて納税の負擔者であつた。

之等の田土は皆國有にして、上は王族より下人民に至るまで、國家より其の耕作權を付與せられたるに過ぎず、故に當時に於ては純然たる土地國有の制をなし、高麗朝に至るに及び、太祖王建は其の建國の功臣に役分田なるものを賜給した、高麗の初期までは朝鮮の土地は悉く國有にして、所有權に對する爭論も起らなければ、小作に對する異議もなく、朝鮮の土地制度は理想に近きまでに行はれて居つた。

然るに高麗中葉以後、王室の衰微と共に王權下に移りて、天下の土地は豪族の私有を爲り、人民は苛斂誅求に逢ふて疲弊し、豪族は收穫の豊富により

て盛んに私兵を蓄へ、陰然として一勢力をなし、動もすれば王室を脅かし、或は兵を挾んで相私闘すること、宛かも我封建時代の如きもの、小さな型が出来て居つた。

高麗の末葉に至りて、此の弊を慷慨したるは大司憲の趙浚であつた、趙浚は豪族の擅まに私兵を蓄へ田土を領有するは、國家の秩序を公安を破壊するものとし、田制改革論を主張したが、王室の無力に豪族の壓迫に依り、其の主張は貫徹すること能はず、鄭夢周の如き執權職の大學者も、事の輕々に決す可からざるを見て、其の旗幟を鮮明にせなかつた、之れが抑も高麗の亡びし所以の一つの原因であつたとも謂ひ得る。

李朝の太祖李成桂は、斷乎として私兵を禁斷し、田制を改革した、蓋し趙浚の主張を採用したのであつた、李朝の此の田制改革は實に李朝五百年の王業の根基を爲せしものであつた、李太祖は非常なる興隆の力を以て、麗末積弊の社會を革新し、豪族の屯田を開放して農民の力を養成した、李太祖の王

王室の無力と
豪族の壓迫

美田沃野は王
族と權臣に奪
占

業が革命の汚名を蔽ひ、一瀉千里の勢を以て發展したるもの、實に此の田制改革の賜であつた、然るに端宗王の朝屯田を復置して不慮に備へんとし、各道觀察使に命じて之を調査せしめ、世祖王の朝に至りては各道荒蕪の地を擇びて屯田を作らした、後ちの驛屯士即ちそれである。

韓末に至りては、王室の權力有りても無きが如く、王室は宮中集權に腐心し、府中は政權爭奪に熱中し、苛斂諂求は前代未聞の悲狀を極め、美田沃野は王族と權臣の奪占に任せ、田制の紊亂は極點に達し、農民は恟々として自家の財産をすら完全に保存する能はざるの境地に悶へ、宛かも高麗の末世豪族の奪占に委したる如く、不安と煩悶を以て其の日を送つた。

李太王の末年財政紊亂の結果、屯田の散じて各郡に在るものは、驛屯士と稱して其の收入及支出は、悉く度支部の管掌する所となり、明治三十七年に至りて日韓協約の結果、帝國政府は韓國財政顧問を推薦し、廢制財政の刷新と共に其の調査に着手し、翌三十八年に至りて統監府の設置せらるゝや、統

監の指導に依りて、明治四十年臨時帝室有財産調査局及國有財産調査局を設け、翌四十一年兩局を廢して更に臨時財産整理局を設け、大體其の歸屬を明かにしたりし雖も、多年の弊制は容易に刷新するこゝ能はず、混沌として之を總督府設置後に持越した。

併合後總督政治の最初に於て、寺内伯は土地制度の根本的確立の必要を認め、全鮮一萬四千三百餘方里の地域に亘り、土地調査を開始するこゝし、臨時土地調査局を設置し、三角測量其の他本調査の基準を爲す諸測量並に地形測量を遂行し、之が圖面及臺帳を調製し、府尹若くは郡守をして之を管理せしめ、更に土地調査の進行するに従ひ、疆界地積を基礎として、一筆毎に其の地番、地目、面積、地價、地主及地位等級を掲記したる土地臺帳其の他附屬諸帳簿並に之に相當せる地籍圖を調製し、五萬分一、二萬五千分一又は一萬分一の地形圖を作成し、更に土地調査の成果を全からしむる爲め、附帶事業として府郡島地籍事務の検査、地誌資料の編纂等の事を施行し、大正七

年十月を以て此の事業の全部は完成した。

此の結果土地臺帳登録の地價を課税標準と定め、且つ不動産登記制度の施行をも完結し、人民の土地所有權は茲に於て全く確立し、國家徵税の標準は茲に於て全く確立した、此の間七箇年の歳月に二十四十餘萬圓の經費を要し土地總筆數は實に一千九百餘萬筆に達した、之れ實に寺内伯の果斷と其の嚴格なる伯の人格が、官紀の緊張と官吏の其の職責に邁進したる結果であらねばならぬ。

按ずるに、租税は舊韓國政府時代に於ても、總督政治時代に於ても、國家の主たる税目にして、韓國時代に於ては租税の徵收に對しては、地方官の私曲に依り、一定の標準はありても無きが如きの状態であつた、併合以前に在りては地税の課税臺帳を量案と稱し、二十年毎に課税の容體及納税主體の異動を調査して、之を定むるの制なりしが、其の制度は確立したりしも、墮落腐敗を極めし地方官は、擅まに課税標準たる土地の結數（反別）を増減又は

隠蔽して、中央政府に詐報し、其の差額を胡虜化して居つた、中央政府は其の弊を察し、韓末に於ては物納を金納制に改めたるも、人民の逋税と官吏の私曲は依然として其の跡を斷たなかつた。

寺内伯は夙に前韓時代の弊を察し、始政翌年直ちに各府郡に於ける地稅の法定課稅臺帳の設備を完成し、同四十五年より大正二年に亘り、課稅見取圖を各府郡面に設備せしめ、之によりて地稅の徵收を的確ならしめ、其の結果大體土地所有權の所在を明かにするを得、又地稅の納入に關しては從來土地所有者は殆ん之に與からずして、小作人に於て納入するの慣例なりしも、元來地稅は其の土地の所有權者たる地主の負擔すべき性質のものなるを以て寺内伯は地方官に命じて一般地主の諒解を得せしめ、大正二年全く古來の慣習を打破された。

寺内伯の一令一行は、電光石火の如く、名將の士卒を操縱するが如し、之を非難するの文官は陰に喧囂たりしも、不肖は寧ろ之を痛快せり、併合當

地稅の増収を
逋税ならしむ

産業及國家財
政の基礎

時の朝鮮は百事創業の際にして、消極的事務に馴れたる文弱の文官を率ゆるこゝに於て、勇往果斷の寺内伯は、頗るマドロク感ぜられたであらう。

然れども伯の果斷に次ぐに其の潑刺たる精勤と、赤誠君國に捧けたる氣概の前には、一般官吏は頗る柔順にして機敏に精勤活動せり、現今の如く官紀の弛緩し、官吏道德の頹廢は見るこゝが出来なかつた、此くて土地制度完成の曉、其の効果の及ぶ所は、單に産業及國家財政の基礎を鞏固ならしむるのみならず。

一、地積を明かにし、土地の所有權其他土地に關する諸般の權利を確認せしが故に、土地の經濟的價値を増進し、其の價格を騰貴せしめたるこゝ。

二、土地の權利に關する證明又は、登記の制度を的確に實行するこゝを得て、賣買、讓與、抵當權等の設定を容易ならしめ、土地の經濟的利用を増大せしめたるこゝ。

三、世運の進歩人文の發達に伴ひ、必然生ずべき土地の紛争を未然に防止
するここを得たること。

四、地稅の基礎を確實にし、負擔の公正を得せしむるが故に歲入の増進を
期し得べく、財政の運用をして圓滿ならしめたること。

五、産業の開發其の他行政の施設改善は、地積の整理に依りて確實なる發
展の効果を擧げたること。

按ずるに、併合前の地稅制度は、數百年前の結制度を襲用し、常に現代の經
濟狀態に適應せざるのみならず、法規弛廢の結果、各道到る處に隱結なるも
のを生ずる等、課稅の公平を失するここ殆んご其極に達し、耕地面積の稱呼
は從來の一斗落（一斗の種を播く面積を謂ふ）或は一日耕（一人一牛一頭一日間に耕す
面積）の單位を用ひ、其の大小區々にして實際の面積を知るに困難であつた。

又土地に關する權利證明の如きも、當事者間に於て作成したる不完全なる
文記に據るか、否らざれば頗る不整備の書類帳簿に基ける郡守の證明に據る

の外なきを以て、常に詐欺的の賣買典當が行はれて居つた、李朝末世の韓國
政府は土地建物證明規則を公布し、土地建物典當規則なきを公布し、以て公簿登
録權利公認の途なきも開かれてはるたが、土地の面積を表示する單位不確實
にして、地籍亂雜なりし爲め、荒蕪地にして課稅を受け、既墾地にして、却
て免稅せらるゝなきの滑稽を見せて居つた。

加之官庭、王族、地方權官は、擅まに人民の土地を横領奪占し、同一土地
にして二重三重の文記（權利書）を認められて居るものなきがあつた、それは所
有權の不確實なりしことに依りて、暴認盛んに行はれ、所有權の繫争絶ゆる
ことなく、當時地方農民の中央政府や權官への訴願は、殆んご横領奪占せら
れたる土地の取戻運動であつた、私の土地は義和宮に奪はれた、私の父の土
地は英親王に奪はれた、慶善宮に奪はれた、閔監司に横奪せられた、李觀察
使、朴郡守に奪はれた云ふ様な訴願事件のみであつた、左様な事件は始政
以來四五十年間に亘りて、總督府に訴願し來る數は、實に夥だしきものであつ